

青年海外協力隊員とEメールで交流

HIROYUKI NAKAI

中井啓之

地歴・公民

雲雀丘学園高等学校

カリキュラム案

■実践の目的

1. メール交換を通じて知ったことをより発展させ、自ら情報を集め、開発途上国の現状・課題や文化を理解する。
2. 人生の先輩としての隊員の方から、「生き様」を学ぶ。
3. 開発途上国や青年海外協力隊員の方に対して、できることは何かを考え、自分達で行動を起こす。
4. 相手国や援助の様子、学習活動を発表し、技能を高める。

授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限 プロジェクトの計画を知る	計画の概要、アンケート、グループ決め	普通教室
2時限 青年海外協力隊の実情を知る	青年海外協力隊について ジョルダンで見てきたこと	視聴覚教室
3時限 自分たちで学習計画を立てる	どんなことを聞いてゆくか、役割分担	普通教室
4時限 ドイツからの留学生との交流	アイスブレイキング、環境について	大教室
5時限 交流する国について調べる	レポート作成	図書室
6時限 初期設定	メール	LAN教室
7時限 Eメールによる交流	メール、記録	LAN教室
8時限 グループ間の共有	中間発表会1、メール、記録	LAN教室
9時限 グループ間の共有	中間発表会2、メール、記録	LAN教室
10時限 Eメールによる交流	メール、記録、自己評価	LAN教室
11時限 ホームページ作成	ホームページをつくらう	LAN教室
12時限 ホームページ作成	ホームページをつくらう	LAN教室
13時限 発表、学習成果の共有	交流発表会1	視聴覚教室
14時限 発表、学習成果の共有	交流発表会2	視聴覚教室
15時限 評価	ふりかえり NZ研修	普通教室



授業の詳細

■生徒

国際科という専門学科の2年生のクラスには、メキシコからの留学生が1年間いたが、7月に帰国した。カリキュラムは、英語を中心に文系科目の授業が多い。第2外国語として、フランス語、スペイン語、中国語の中から1つ選択し、週2時間学習している。1年次にJICAに1日訪問して、「援助・環境についてのワークショップ」「青年海外協力隊員OBの話」「海外からの研修員との交流」などを行っている。2年生の2月に1ヶ月間、ニュージーランドへ研修旅行を行っている。

■科目「比較文化」

科目「比較文化」は、週1時間を社会科教員と外国語科教員の2人で担当している。なるべく生徒の主体的な活動を重視して進めている。

A. 年間指導目標

- ①世界の諸地域の人々の生活・風俗・習慣・生き方などについて、多面的に認識を深め、国際協力・国際協調の態度を養わせる。
- ②ニュージーランド比較文化研修の事前学習を通して研修成果を高める。

B. 年間計画・単元・指導内容

Guidance「文化の多様性について」

The 1st project「アメリカ文化を調べよう」

【調査・発表・レポート】

The Extra project「国立民族学博物館見学」

特別展「弁当からミックスプレートへ」

日系移民について学習する。

The 2nd project「青年海外協力隊員とEメールで交流」【調査・発表・レポート】

C. 留意点

- ①一方的な講義を極力控える。生徒が自主的に活動する場面として班活動や発表・討論を多く設定して授業が活性化するように努めた。
- ②研究に必要な資料をできる限り用意する。図書室との連携。インターネットも活用する。
- ③評価について、提出を求めたレポートの質に加え、普段からの授業への参加の姿勢・発表の際の表現力

なども成績に加味する。

- ④生徒がより主体的に授業に参加できるように、機会あるごとに授業内容への提案を求める。

■授業「青年海外協力隊員とEメールで交流」のねらい

1. メール交換を通じて知ったことをより発展させ、インターネットなどで、自ら情報を集め、開発途上国の現状・課題や文化を理解させる。
2. 人生の先輩としての隊員の方から、「生き様」を学ぶ。
3. 開発途上国や青年海外協力隊員の方に対してできることは何かを考え、国際理解・援助について理解させる。
4. 相手国や援助の様子や学習活動を発表させる。

関西大学総合情報学部の久保田教授が運営されているプロジェクトの「Meet The GLOBE」の活動の縁で、協力隊に興味を持ち、2001年1月に単独でミンダナオ島の隊員の理数科教員相田さんを訪ねた。

そして、2001年8月、JICAの高校教員海外研修旅行に参加させていただき、ジョルダンで隊員、シニアボランティア、専門家の方の活動を拝見させていただいた。今までのJICA訪問で隊員OB・OGの方の話をお聞かせいただくのとは違い、やはり、その活動を目の当たりにさせていただいたことはとても勉強になった。自分自身の開発途上国についても考え方が深まり、国際的な援助について一度考えることができたと思う。もっとお話を聞かせていただきたかったが、時間的な制約もあり、充分ではなかった。経験をのちに講演として聞くだけでなく、実際に現場を見せていただくことは大切だと思った。

そこで、生徒たちに、開発途上国の実情を学習させ、少しでも深く国際協力について考えさせることはできないかと考え、青年海外協力隊員とのメールの交流を計画した。また、限界があると思うが、人との交流を大切にされている隊員の方の生き方も含め学ぶことができれば、自己を見つめ、自分探しをしている高校生にとっては有益なものになると考えた。

関西大学総合情報学部の「Meet The GLOBE」を通じて、隊員の方を紹介いただいた。特に大学院生の坂井さんとはEメールでの打ち合わせを行い、授業の進め方やメーリングリストなどのコンピュータ

隊員と生徒の配当

班	生徒人数	任 国	任 地	職 種
1	4	エル・サルバドル	サン・サルバドル	体育
2	4	ジンバブエ	マシング	園芸作物
3	7	バブア・ニューギニア	アロタウ	理数科教師
4	7	モンゴル	ウランバートル	電子工学
5	3	中国	湖南省長沙市 コワンシー壮族自治区桂林市	日本語教師 幼稚園教諭
6	5	タンザニア	ダルエスサラム	コンピュータ
7	5	ラオス	ウドムサイ県	保健婦
8	4	ブルキナファソ		植林
9	4	ジョルダン	バルカ実科大学	情報 (シニアボランティア)

関連のことを相談したり、隊員の方とのパイプ役になっていただいた。また、ジョルダンの方は、JICA研修旅行の視察の際にお話を伺ったシニアボランティアである。

隊員と生徒の配当は上の表のとおりである。

授業の展開

授業は生徒たちがニュージーランド研修に出発するまで（2月）の継続のため、途中経過及び各授業のポイントを抽出して記してゆく。

1時限目 「授業計画を知る」

今回の授業の目標について、事前の知識を調べるために、自由記述のアンケート調査を行った。授業後に、そのイメージがどのくらい変化にするか、比較しようと考えた。

生徒たちの回答（一部抜粋）

Q1: 「途上国と聞いて、どんなイメージを思い浮かべますか?」

「貧困」「飢餓」「難民」「暑い所」「危険」「治安がわるい」「お金がない」「衛生が悪そう」「機械とかがない」「食料・医師・薬など不足している物が多い」「今、頑張るところ」「日本とかより未来に希望をもってそう」

Q2: 「“青年海外協力隊”と聞いて、どんなイメージを思い浮かべますか?」

「ボランティア。途上国の人たちの（いろんなことを教えてくれる）先生」「世界平和のために活動している」「大変そう。世界中の国に行っている」「すごいチームワークで世界を助けてそうな予感」「若い。子どもに何か教えてくれる」「20代のオニイサンたち。頭いい。てきぱきして自分の考えを持っている人」「植木などの植え方を教えていて、自分たちで食べ物を作って生活する方法を伝える」「砂漠で植林、井戸掘り、青空学級。食料などを支給する人。水を引く?」「現地の人と笑顔で接している」「心が広い。力が強い。かっこいい。頭がいい。明るそう。たくましい。やさしそう」「英語がペラペラ。人々を助ける。すごいと思う。勇気がある。行ったら人生変わりそう」

Q3: 「“途上国”と聞いて思い出す国」

ほとんどの生徒が、中国、インド、ケニア、ベトナムの4カ国のいずれかを挙げていた。タンザニア、ベナン、ジャマイカ、スーダン、ラオス、カンボジア、ブータン、メキシコなど。

7時限目 Eメールによる交流

生徒たちは校内の個人のEメールアドレスを全員が持っているが、あまり使用していない。今回はグループごとに9つのメーリングリスト（隊員・生徒・教員・大学関係者）を作成し、グループ内のお互いがそれぞれのメールを見ることができるようにした。教員と大学関係者はすべてのリストに参加した。生徒たち





には、メールの秘密性は保持されるものであるべきだが、今回の交流は公的なものであるため、教員はメールに参加はしないが、メール内容を見ることを知らされた。

交流相手からのメールの返事を送るにあたり、「…どう返事を書けば良いだろう。」という質問がたくさん出た。他にも、隊員の方によって、協力隊に参加した動機を熱く語ってもらった生徒たちは、「…すごく熱意のある人だ。でも、そんな熱い“語り”に、僕たちは、どう返事をすればいいだろう…。言いたいことはいっぱいあるけど、でも授業時間の中じゃ、時間も短くて全部を伝えきれないし…」と、返事を考え込む生徒もいた。

それぞれがメールを打つのがよいか、グループでまとめるのか、隊員にも相談しつつ、グループでも質問などが重複しないように相談させた。生徒のコンピュータのレベルは、1年次にタイプやLLの授業で使用しているため、タイピング・ワープロ・メール・インターネットのソフトの使用については全く説明する必要がなかった。家庭でメールを行っている生徒も多く、写真の貼り付けやレジュメの作成なども積極的に教えながら行っていた。

生徒自身がこの学習活動の中で学んでいくことであるが、隊員に対して失礼があってはいけないので、日本と開発途上国の環境の違いや隊員の任地での生活を考慮することを強調した。そこであえて、次のような指示をした。「図書室で調べた相手国の基礎知識を頭に入れておく」「相手の状況（気候や国の様子、通信事情、仕事の忙しさなど）をおもんばかる」これらは、あたりまえのことではあるが、最近の生徒たちのコミュニケーションでは不十分なのではないかと考えた（もし失礼があっても、隊員の方からご注意いただけたらとも考えていたが）。

週1回の授業であるためメールのチェックの間隔があくので、放課後にもLAN教室を開放した。生徒はクラブや補修などで忙しいが、多くの生徒が参加してチェックを行っていた。

8時限目 中間発表会①、メール、記録

グループ間の学習成果の共有と発展につなげること

を目的に、中間発表会を行った。前回の授業時に、各グループの代表が作成したレジュメを、私にメールで送信して提出とした。そのレジュメをLAN教室のテレビモニターに表示させた状態で、各グループが白板の前に立って、マイクを用いて3～5分くらいの口頭発表を行った。他の生徒は、発表を聞いて、その内容の感想や疑問点、アドバイスをワークシートに記入した。以下は、発表内容の要約でメールの内容も類推できると思う。

エル・サルバドル（職種：体育）班

- ・隊員のエル・サルバドルでの活動の紹介
（卓球やテニス、バスケットボールを指導されていること、まだ任地に赴任されて4ヶ月しか経っていないことなど）
- ・エル・サルバドルではスペイン語が公用語になっている。
- ・エル・サルバドルに対してのイメージが違った。
（送付された現地の西洋風のショッピングセンターのデジカメの写真を見て、いわゆる「途上国」というイメージとは全く違ったという感想を述べていた）

ジンバブエ（職種：園芸作物）班

- ・隊員のプロフィールの紹介
（日本で高校の先生をしていらして、現職で協力隊に参加されたこと）
- ・隊員が月に一回のペースで作成されている、滞在記「シャマリ通信」の紹介
- ・ジンバブエの公用語である「ジョナ語」での挨拶の言葉の紹介
- ・ジンバブエの主要な交通機関であるミニバス「コンビ」の紹介
- ・ジンバブエの食事・気候について
- ・コンピュータが故障したようで、暫くメール交換が出来ないことを、わざわざインターネットカフェからメールを送ってくれたこと。そのために、ローマ字でメールを送ったこと。

（「コンピュータが使えない状態で大変なはずなのに、私たちのことを気遣ってくれて、すごくいい人だと思っていました」との感想）

パプア・ニューギニア（職種：理数科教師）班

- ・隊員のプロフィールの紹介
（協力隊への参加動機についてなど）
- ・隊員の職種紹介
（中学3年生～高校3年生までの理科・数学の先生をしていること）
- ・パプアでの数学の授業では、電卓の使用が許されているものもあること。
- ・パプアの医療についての紹介
（日本ほど整っているわけではないので、普段から健康管理に気をつけないといけないこと）
- ・パプアでは、星がとてもキレイらしいこと。（パプアでも「しし座流星群」が見られたこと）
- ・パプアでは、キリスト教が主な信仰であること。

モンゴル（職種：電子工学）班

- ・隊員のプロフィールの紹介
（大学で電子工学を教えていらっしやること、モンゴルのラジオ番組に毎週パーソナリティとして出演していること）
- ・モンゴルの食事について（羊肉をよく食べ、ジンギスカンが美味しいこと）
- ・モンゴルのスポーツについて（モンゴル相撲が盛んなこと）
- ・モンゴルでは、宇多田ヒカルや松たか子など、日本人アーティストが非常に人気があること。

中国（職種：幼稚園教諭、職種：日本語教師）班

- ・隊員のプロフィールの紹介、任地の説明
（観光地で有名な桂林。湖南省・長沙市）
- ・協力隊員を志願された動機について
（海外で働くこと、生活すること、国際交流に関心があったことや、日本語を教えることを大学で勉強されていたことなど）
- ・中国に派遣されて一番大変だったこと（赴任後、間もなく、体調を崩したことなど）
- ・桂林は観光地ということもあり自由な雰囲気もある

けど、長沙は毛沢東のお膝元なので、まだ保守的な部分が残っていること。

- ・そんな保守的な長沙にも、「平和堂」（滋賀県に本社があるスーパーマーケット）があるなど、日本資本がどんどん中国に進出を果たしていること。

タンザニア（職種：コンピュータ）班

- ・タンザニアでは教育制度がしっかりいるようで、就学率は悪いものの、小・中・高・大学という進学の流れは存在していることが意外だった。
- ・タンザニアでの年末の行事と言えば、クリスマスよりも、「ラマダン」であること。1ヶ月に渡って断食を行い、それが終わればお祭り騒ぎになること。
- ・タンザニアでは食材は豊富のようで、果物などは充実しているとのこと。※ ラオス班、ブルキナファソ班、ヨルダン班は、時間の関係上次回とした。

今後の予定

隊員の方には忙しいにもかかわらず、ご厚意のおかげで交流が進んでいる。生徒たちは写真でのやり取りも進めている。すべての班が手書きのクリスマスカードを作成中で、エメールで送ろうと考えている。Eメールの利便性と郵便でしか伝わらないことを気づいてもらおうと思う。また、現地の学生との交流を提案いただいている隊員の方もいるので、生徒たちは英語や第二外国語の学習の成果を実際に使ってみる機会になるかもしれない。

メール・交流内容も任国の様子・個人的な内容から青年海外協力隊員・開発途上国とのかかわりの中で、国際協力に対する考えなどに関わる内容にレベルアップしていく指導が必要に思える。

交流の記録は、メール送受信のかたわら、ワープロソフト上に記録している。このあと、グループでホームページを作成する予定にしている。技術的な問題が発生しそうであるが、他の教員の協力や業者の力を得ながら進めたい。



偏見を越えたイスラム文化理解を目指して

—ヨルダンの人々の暮らしを通して—

KATSUYUKI MATSUI

松井克行

地歴・公民

大阪府立西淀川高等学校

カリキュラム案

■実践の目的

2001年9月11日の「米国同時多発テロ事件」以降、連日のイスラム原理主義過激派勢力に関する報道は、イスラム教徒＝イスラム原理主義＝過激派、テロリス

トという誤った認識(偏見)を生徒に生じさせかねない。一方、日本には、約30万人のイスラム教徒が暮らしている。多文化共生社会を築くためにも、イスラム文化の多様性について偏見を越えた理解を図る必要がある。このような問題意識から、以下のような学習目標を設定した。

授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限 (1) 中東情勢の理解。 (2) イスラエルの隣国としてヨルダンを理解。 (3) ヨルダンのイメージ(先入観)を問う。 (4) ヨルダンの現状を推測する。 (5) ヨルダンの現状を知る(先入観を崩す)。	(1) 「米国同時多発テロ事件」が、なぜ、米國を標的にしたかを、パレスチナ問題と関連付けて学習する。 (2) ヨルダンと周辺諸國の位置関係を、地図で確認する。 (3) ヨルダンに対するイメージを問う。 (4) 「イスラム/ヨルダンクイズ」を行なう。 ※答え合わせをしないで回収。 (5) ヨルダンの日常生活をビデオで確認。 ※現地で撮影した映像を使用(約20分)。	プリントNo.1 「米国同時多発テロと中東」 プリントNo.1 「米国同時多発テロと中東」 プリントNo.2 「ヨルダンは、どんな国と思うか?」 プリントNo.3 「イスラム/ヨルダンクイズ」 プリントNo.4 「ビデオ① "素顔のヨルダン" ワークシート」
2時限 (1) ヨルダンへの先入観を崩す。 (2) イスラム教の基本的な理解。 (3) グローバル文化の類似性から、ヨルダンへの先入観を崩す。	(1) 「イスラム/ヨルダンクイズ」を返却。 ※答え合わせをした後、返却し解説。 ⇒前回の復習と今回の導入。 (2) イスラム教の基本的な理解。 ※イスラム教と原理主義と過激派の区別。 (3) ①ポケモンのTV放映は中止されたが、街には、ピカチュウの商品等があふれる現実を提示(先入観を崩す)。 ②ヨルダンの様子をTV番組から知る。 ※自己のイメージとのギャップに気づく。 ※現地で撮影した映像を使用(約15分)。	プリントNo.3 「イスラム/ヨルダンクイズ」 プリントNo.5 「イスラム教について/ポケモンは反イスラム!？」 ・現地で撮影したピカチュウの写真集。 ・現地のコココーラの缶や、マクドナルドの価格表。 プリントNo.6 「ビデオ②ヨルダンのTV番組ワークシート」

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
------------	-------	------

3時限

- (1) ヨルダンについての理解を深める。
- (2) 文化相対主義に立ち、異文化を理解することの重要性を学習。
- (3) 先入観や無知から生じる誤解を考える。
- (4) 青年海外協力隊員の活動を理解する。

- (1) ヨルダンの基本的な地理的情報を学習。
例：地形、気候、人口、民族構成、宗教、政治形態、言語、通貨、経済。
- (2) 文化相対主義の視点に立ち、ヨルダンを理解する。
例：自文化中心主義的視点に立つ生徒の感想、質問を基に考える。
- (3) 日本人のヨルダンへの誤解を考える。ヨルダン人の日本への誤解を考える。
- (4) ビデオ：社会教育施設で活動する青年海外協力隊員と少年たちの活動の様子。
※現地で撮影した映像を使用（約15分）。

民族衣装（実際に着用）。
プリントNo.7
「ヨルダンの情報」
プリントNo.8
「異文化理解は難しいーヨルダンに関する感想から」
・生徒の感想、質問例。
・ヨルダンの少年のイメージ例。
・ヨルダンの学校で教えられた誤解の例（青年海外協力隊員からのEメールより）。
・ビデオ映像。

4時限

- (1) 情報不足による思いこみが“誤解”を生むことを理解する。
- (2) ヨルダンと日本の情報の違いを理解。
- (3) 重層的（多面的）で動的（可変的）に文化を理解する。
- (4) ヨルダンへの援助の必要性を理解。
- (5) 援助内容の理解。
- (6) ヨルダンの抱える問題を理解する。
- (7) まとめ
・日本とヨルダンとの相互理解をめざして。

- (1) 情報不足による思いこみが“誤解”を生むことを理解する。
例：ヨルダンの民族衣装を見て「タリバン」と連呼した生徒たちの誤解を考える。
- (2) ヨルダンの新聞と日本の新聞の比較。
- (3) 重層的（多面的）で動的（可変的）に文化を理解する。
例：1.地域（文化圏）の伝統文化の視点。
2.国レベルでの伝統文化の視点。
3.近代化による変化の視点。
4.グローバル化による変化の視点。
- (4) ヨルダンへの援助が、中東の平和のために重要な意味をもつことを理解する。
- (5) 水対策、交通対策、青少年教育、柔道など青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、専門家派遣の活動内容を理解する。
※現地で撮影した映像を使用（約15分）。
- (6) ヨルダンの抱える問題として、水資源問題、技術者の海外流出の問題（国内産業未発達）等を理解する。
- (7) まとめとして、以下の作文課題を出す。
1.ヨルダン人に日本を紹介する。
2.日本人にヨルダンを紹介する。

プリントNo.9
「情報不足による思いこみが、“誤解”を生む？」
・ヨルダンと日本の新聞（読売、朝日、毎日、産経、日経）。
・日本とヨルダンの文化の比較表（4つの視点から）。
・ヨルダンは、それほど困っていない国なのに、なぜ援助をするのか？
・どんな援助をしているのか？
・ビデオ映像。
・ヨルダンの抱える問題？
プリントNo.10
「まとめのワークシート」



- ①生徒が、イスラム文化について、偏見やステレオタイプ的な理解を越えて、正しく理解できる。
- ②生徒が、イスラム文化の多様性（例：宗教的に寛容な国もある）を、ヨルダンを例に理解できる。
- ③生徒が、発展途上国ヨルダンの抱える問題点について理解できる。
- ④生徒が、青年海外協力隊の活動（ビデオやEメール）を通じて、国際協力について理解できる。

授業の概要

1時限目

授業では、プリントNo.1「米国同時多発テロと中東」により、「米国同時多発テロ事件」と中東問題（パレスチナ問題）を結びつけて学習した後、イスラエルの隣国としてヨルダンを紹介した。人口の70%がパレスチナ人（難民として流入）であること、首都アンマンでの「パレスチナのインティファーダー周年を悼むデモ」の写真を



紹介した。その後、「ヨルダンとは、どんな国と思うか?」と、生徒のヨルダンへのイメージ(先入観)を確認した。前述したようなイスラム教へのマイナスイメージや、パレスチナ問題の学習より、かなり否定的なイメージ(先入観)が多いであろうことが予想された。結果は、予想を上回る否定的なイメージ(先入観)だった。

「ヨルダンは、どんな国と思うか?」生徒の感想例

※()内は筆者の補足、コメント。

- ・イスラエルの近くにある国。内戦が続いている。イスラム教徒が多いそう。
- ・とても貧しく食糧もまともに食べられなく、いつ戦争が起こってもおかしくないような国。
- ・頻りに民族どうしの接触(紛争?)が起こっている。民族バランスが不安定で落ち着かない。
- ・内戦が続いている国、窓には光が外に見えないようにしてある。外に出れば銃弾が飛んでいる。
- ・危険がいっぱいで、毎日恐れて生きている感じ。宗教命みたいな歴史的なことを大切にしている国。
- ・暑い。ハエがあちこち飛んでいる。砂嵐がよく来る。発展途上国。

さらに、ヨルダンの現状やイスラム文化に関する知識を問う「イスラム/ヨルダンクイズ」を実施した。

最後に、現地で撮影したビデオ映像を流した。先程の「ヨルダンは、どんな国と思うか?」や「イスラム/ヨルダンクイズ」のイメージと、実際のヨルダンの映像を比べて、異同を確認するためである。

多くの生徒が、ヨルダンの映像を見て、自己のイメージとの違いに驚きを見せた。

生徒の感想例

- ・日本と余り変わらない事がわかった。品物も豊富で人口も多い。
- ・もっと民族的な衣装を着ていると思っていたけど、普通の服装だった。
- ・予想とはるかに違い、平和そうだった。危ない国と思っていたのに…。パソコンにはアラビア語が出るし、マクドナルドも普通やし。乏しいかと思ったけど、日本と変わらない。
- ・コーラやマクドナルドやキャラクターなど日本にあるものがたくさんあったので驚いた。

注意すべき点として、これらの映像は、首都アンマンを中心とするものであり、地方では、保守的な文化が強く、これほど開放的ではなく、伝統文化が根強いことを補足して授業を終えた。

2時限目

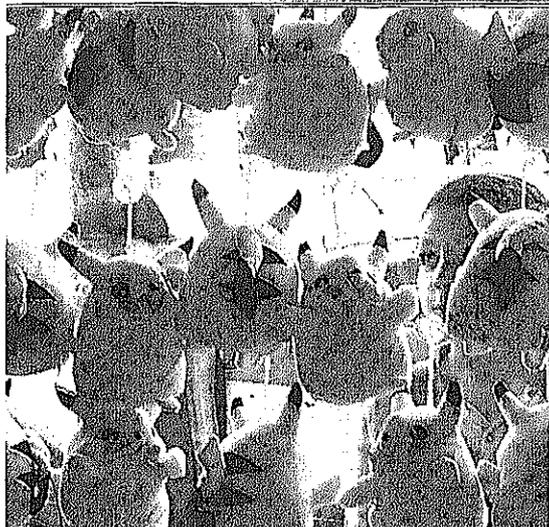
本時の目標の第一は、イスラム教の正しい理解である。プリントNo.5「イスラム教について/ポケモンは反イスラム!」では、まず、世界宗教の1つとしてイスラム教を位置づけた後、イスラム教の基本的知識を学習した。ここでは特に「イスラム教」、「原理主義」、「過激派」の区別の必要性を強調した。次に、「ポケモンは反イスラム!」(朝日新聞2001年4月6日国際欄)の記事を紹介した。

プリントNo.3

「イスラム/ヨルダンクイズ」

- ①イスラム教の女性は、皆ヴェール(ヒジャーブ)を強制されている。 ×
- ②「クイズ\$ミリオネア」のアラビア版のTV番組があり、日本そっくりの進行である。 ○
- ③ヨルダンでも、ポケモンが人気。ピカチュウのグッズが街にたくさんある。 ○
- ④アフガニスタンに潜伏していると見られるイスラム過激派の指導者「オサマ・ビン・ラディン」の名の意味は、「ラディンの子オサマ」である。 ○
- ⑤ヨルダンでは、祝い事があると、空に銃を撃つ習慣がある。 ○
- ⑥アラブでは、トイレで用を足した後、紙を使わず、水で洗う。 ○
- ⑦死海の水は、海に流れる前に、全て蒸発してしまう。 ○

- ⑧ヨルダンは、日本よりも石油産出量が多い。 ×
- ⑨ヨルダンは、イスラム教徒がほとんどなので、お酒は売っていない。 ×
- ⑩イスラム教徒は1日5回のお祈りをする義務があるが、必ず5回やらなくてもよい(1度に何回分かをまとめてやってもよい)。 ○
- ⑪死海の水は、塩分濃度が濃いので、誰でも浮くというのはウソだ。 ×
- ⑫ヨルダンにはマクドナルドがあるが、男の店員しか働いていない。 ○
- ⑬ヨルダンでもスイカやヨーグルトや果物ジュースが人気だが、なぜかトマトは生で食べるほか「焼きトマト」で食べる。 ○
- ⑭ヨルダン国王は、イスラム教の開祖ムハンマドの血筋を引いている。 ○
- ⑮ヨルダンでは、学校や仕事は昼の2時頃で終了。帰宅して、家族そろって昼食をとり、その後はテレビを見たりして楽しく過ごすのが一般的な暮らし方である。 ○



「クイズ\$ミリオネア」等が、実際にヨルダンで放映されていることを確認した（「クイズ\$ミリオネア」のオリジナル版は、米国ABC放送で放映されている「Who wants to be Millionaire?」であり、日本を始め、世界54ヶ国で放映されている）。

ビデオの概要

- ・ポケモンの違法ソフトビデオが売られている様子。
- ・「クイズ\$ミリオネア」のアラビア版のTV放送。
- ・「ヘイ!ヘイ!ヘイ!」に似た歌番組のTV放送。
- ・欧米のプロモーション・ビデオそっくりの歌手のプロモーション・ビデオのTV放送。
- ・「トムとジェリー」や「キャプテン翼」といったアニメのTV放送。

生徒の多くが、ポケモンや「クイズ\$ミリオネア」等が、グローバル文化として、ヨルダンに普及していることに驚きを見せた。

生徒の感想例

- ・日本と同じクイズ番組をやっていたのが面白かった。
- ・ピカチュウがあったことにびっくりした。

- ①カードの交換はかけ事
- ②進化論に基づくキャラ
- ③ダビデの星連想させる

ポケモンは反イスラム!

「カイロ5日」(日本)のデニス・キアラタター「ポケモンズター」(ポケモン)キアラタターの立場から、イスラムの立場を中心にして、キアラタターのカード交換を、イスラムの禁止するキアラタターと見做すこと判断された。

サウジアラビアの公式指図書が3月下旬に禁止の宗教判断(フアトワ)を下したのに続き、カタールの同指図書カラターウィ(師)も、ポケモン関係の映画やテレビを禁止する判断を下した。①カード交換はキアラタター(キアラタター)は連

サウジでは販売禁止令

化論に基づく(カード)に書かれたがイスラエルのタビエの星を連想させる一文字を理由に禁じている。ポケモン関係の人形などは、アラブ諸国の子どもの間でも大人になつていくが、イスラム法に基づく禁制品を、イスラム政府は、同指図書を受けて販売禁止命令を出した。公式指図書判断は国内のみだが、カラターウィ(師)も、イスラムの禁止するキアラタターと見做すこと判断された。サウジアラビアの公式指図書が3月下旬に禁止の宗教判断(フアトワ)を下したのに続き、カタールの同指図書カラターウィ(師)も、ポケモン関係の映画やテレビを禁止する判断を下した。①カード交換はキアラタター(キアラタター)は連



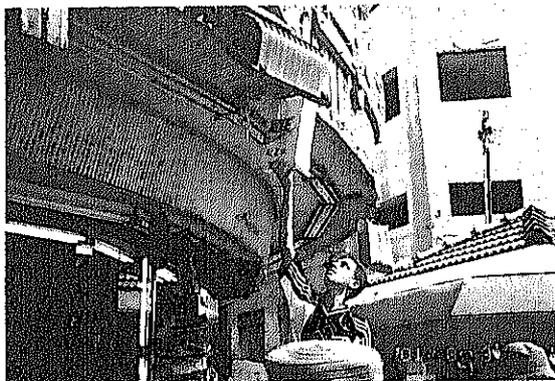
ピカチュウ



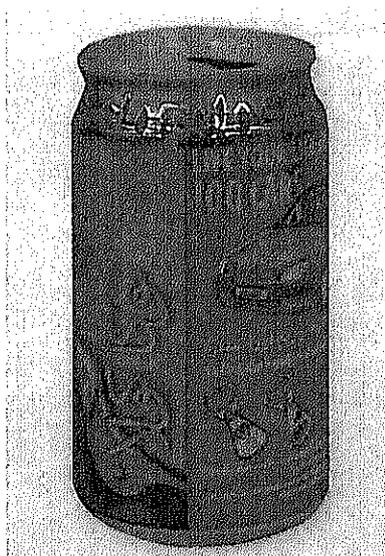
ピカチュウ

ヨルダンでは、TV番組の放映は禁止したものの、ポケモン関係の人形の販売は黙認されており、街にはピカチュウの商品があふれており、映画の違法ソフトビデオまで売られていた。この点で、ヨルダンは、ポケモン商品の販売禁止を行なったサウジアラビアとは異なり、寛大な対応を行なっている。最後に、現地でも撮影したビデオから、アラビア版の

ヨルダン



ナイキ



コーヒー缶



マクドナルドのメニュー

3 時限目

本時の目標の第一は、ヨルダンについての理解を深めることである。そこで、ヨルダンの民族衣装（男性が頭にかぶる布＝カーフィーヤ、布と留める輪＝イカール、全身を包む白い衣服＝ソープ）を着用して登場した。生徒たちをびっくりさせてやろうとしたのだが、教人の生徒が「タリバン、タリバン。」という反応をした。ヨルダンの民族衣装とアフガニスタンの民族衣

装の見分けがつかないようであった。そこで、頭にかぶる布（カーフィーヤ）と頭に巻く布（ターバン）の違いなどを指摘した。

本時は、まず、ヨルダンについて理解を深めるため、まず基本的な地理的情報について学習した。地形、気候、人口、民族構成、宗教、政治形態、言語、通貨、経済などである。特に、民族構成としてベドウィン系アラブ人が約30%で、パレスチナ人が約70%と、隣国イスラエルから難民として移り住んだパレスチナ人の

割合が高い点を強調した。ヨルダンの人口は、この50年間で10倍に増加しているが、その主たる理由がパレスチナ人の増加である。

次に、文化相対主義に立ち異文化を理解することの重要性を学習する。プリントNo.8「異文化理解は難しい—ヨルダンに関する感想から」では、自文化中心主義的視点に立つ生徒の感想や質問を題材に、相手の立場に視点を変える（文化相対主義の視点に立つ）ことの重要性を考える。例えば、「ヨルダンのTV番組は、欧米や日本の真似ばかり？」という質問に対して、「欧米の文化の影響を受けている点では、日本もヨルダンも同じでは？」という視点を提示する。実際、多くの生徒が日本のオリジナル番組と考えていた「クイズ\$ミリオネア」が、実は米国ABCの番組に由来していることを説明すると、一様に驚き納得した。さらに、先入観や無知から生じる誤解として、「ヨルダンは危険だ。」「ヨルダンの女の人全員、ヴェールをかぶっている。」といった、日本人のヨルダンへのイメージ（先入観）を挙げた（これらは、筆者の友人や同僚の方々の第一印象を基に作成した）。次にヨルダン人の日本へのイメージ（先入観）として、ヨルダンの少年たちの答えを挙げた（後でビデオに登場する社会教育施設で出会った少年たち）。「空手、ヌンチャク、柔道、雨が多い、平和」である。このうち、空手やヌンチャクは、香港のカンフー映画の影響と考えられるが、日本へのイメージとしては、誤りである。最後に、ヨルダンの青年海外協力隊員からEメールで頂いた「ヨルダンの学校で教えられた誤解」の例を提示した。これには、一同驚いた。

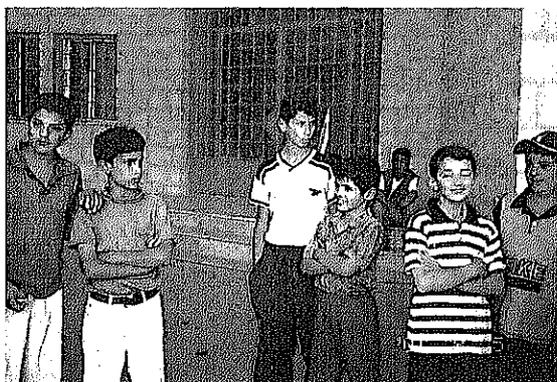
「ヨルダンの、ある学校で教えられていた誤解」の例

「日本人の目が細いのは、原爆が落ちたから。」と教師が生徒に教えていた。

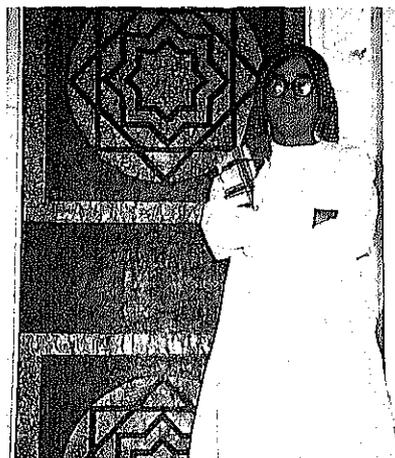
最後に、現地で撮影したビデオから、青年海外協力隊員の活動を紹介した。

ビデオの概要

- ・社会教育施設で活動する青年海外協力隊員と少年たちの活動の様子。
- ・柔道の指導をする青年海外協力隊員と青年たちの活動の様子。



ヨルダンの少年たち



民族衣装の着用例

ヨルダン

4時限目

前時の授業後に、ちょっとしたハプニングが起きた。ヨルダンの民族衣装を着たまま、廊下を歩いていたら、出会った生徒が、皆、口々に「タリバン、タリバン」と叫んだのである。このような誤解の深刻さに気づいたため、本時では、プリントNo.9「情報不足による思いこみが“誤解”を生む？」として、このハプニングを教材として取り上げることとした。ヨルダンの民族衣装を見て「タリバン」と連呼した生徒たちの誤解の原因を考えるのである。

このような誤解が起きるのは、ヨルダンにおいて日本の情報が不足しているからである。同様に、日本においても、ヨルダンの情報が不足していることにより、種々の誤解が生じている。では、情報不足はなぜ起きるのか？本時では、「情報不足の原因の一つは、マスメディアの情報の偏りにある。」との仮説の下、日本の新聞（代表的な5紙：読売、朝日、毎日、産経、日

化を捉えようとするものである。筆者は、この考え方を基に、生徒にわかりやすい語句に変えて、以下の表を作成した（授業で用いたものを多少修正した）。

以上の表を作成することにより、日本とヨルダンの文化の類似点と相違点が明らかになる。主に伝統文化のレベルでは両者は異なるのであるが、近代化やグローバル化の影響により類似点が多くなり、変化のレベルも高くなるのである。

次に、ヨルダンへの援助の必要性、援助内容の学習、ヨルダンの抱える問題について学習した。援助の必要性については、イスラエルと他のアラブ諸国の間を取り持ち、平和を創出することの重要性を説明した。援助内容の学習とヨルダンの抱える問題についての学習は、現地で撮影したビデオを活用しながら行なった。援助内容

としては、水対策、交通対策、青少年教育、柔道など青年海外協力隊やシニア海外ボランティア、専門家派遣の活動があることを、ビデオを見せながら説明した。ヨルダンの抱える問題としては、水資源問題、技術者の海外流出の問題（国内産業未発達）等を説明した。

最後に、「まとめのワークシート」として、「1.ヨルダンの人に日本について紹介して下さい。2.日本の人にヨルダンについて紹介して下さい。」という課題を出した。

生徒の回答例

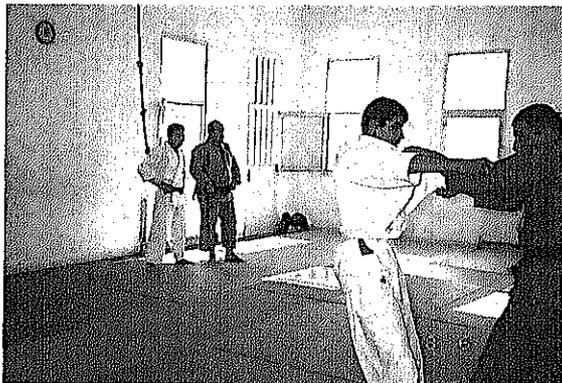
1. ヨルダンの人は、私達日本の事に対して誤解をたくさんしていると思いますよ。1つの例で、「原爆が落ちたから目が細い」んじゃないくて、顔は個人の個性や性格によって変わっているし、全ての人の目が細い訳でもないヨ！後は、交通は何かと便利で食糧も豊富。確かに平和ボケしてしまっているでしょう。便利すぎて不便な面もあるが、ぜいたくな国です。
2. ヨルダンの国はぶっそうで、戦争ばかりの辺りな貧しい国だというイメージが多いと思いますが、それはまちがっていると思います。宗教的な事も大切にしながらマクド（マクドナルド）、ポケモンといった日本と似た面が非常に多く、外はとても暑く、国全体はにぎやかで、人も多い、優しいと思う。TV番組も大量にあり、活気ある国！

ビデオの概要

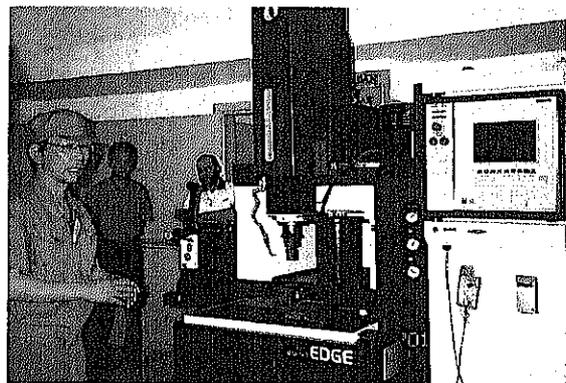
- ・ 専門家による水対策の説明と、水源としてのヨルダン川、浄水場建設プロジェクトの様子。
- ・ ヨルダン柔道連盟でのナショナルチームの練習風景と、指導する青年海外協力隊員の話。
- ・ 職業技術学院プロジェクトの様子と、指導者として活動している専門家の話。
- ・ 大学で情報教育を指導しているシニアボランティアの活動の様子。

表1 日本とヨルダンの文化の比較表

グローバル化の影響（現代）	マクドナルド 欧米のTV番組 ポケモン（日本発）		新 ↑ 古
近代化の影響	洋服 工業化（日本は輸出国、ヨルダンは輸入国）		
日本/ヨルダンの伝統文化	着物 相撲 神道	民族衣装 水たばこ	
東アジア/西アジアの伝統文化	仏教	イスラム教	



ヨルダンの柔道場



職業技術学院



おわりに

今回の授業では、ヨルダンで活動中の青年海外協力隊員の方々とのEメールによる交信やデジタルカメラによる映像が役立った。Eメールの利用により、現地の今の情報が、直接、教室に伝えられるからである。この授業は4回で終了したが、現在も、現地の隊員との交流は継続中である。隊員からの情報を生徒に伝え、教室の反応を現地へ伝え続けているのである。今後、このようなタイプの交流活動が増加していくことを期待したい。

参考資料・写真等

〔主要参考文献〕

- 青木 保『異文化理解』岩波新書、2001年。
板垣雄三監修、山岸智子・飯塚正人編『イスラーム世界がよくわかるQ&A100
—人々の暮らし・経済・社会』亜紀書房、1998年。
S.C.ファインスタイン著（石浜みかる訳）『目で見る世界の国々@ヨルダン』国土社、1991年。
大塚和夫『イスラーム的—世界化時代の中で』日本放送出版協会、2000年。
小山内美江子『ヨルダン難民救援への旅』岩波ジュニア新書、1991年。
片倉もとこ「あるベドウィンのつぶやき」永田雄三・松原正毅編『イスラーム世界の人びと—3牧畜民』東洋経済新報社、1984年、pp.1—33。
- 片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書、1991年。
小杉 泰『イスラームとは何か—その宗教・社会・文化』講談社現代新書、1994年。
清水芳美『アラブ・ムスリムの日常生活—ヨルダン村落滞在記』講談社現代新書、1992年。
鈴木正行『ヨルダン、イスラエル、そしてシナイ—12年目の入国』学文社、1996年。
地球の歩き方編集室『地球の歩き方 ヨルダン・シリア・レバノン編 2000~2001年版』ダイヤモンド社、2001年。
ドロシー・ギルマン著（柳沢由美子訳）『おばちゃまヨルダン・スバイ』集英社文庫、1998年。
二宮道明『データブック オブ ザ ワールド2000年版』二宮書店、2000年。
藤村 信『中東現代史』岩波新書、1997年。
MICROSOFT『エンカルタ百科事典2001』マイクロソフト社、2001年。
松本重治監修、板垣雄三編『中東ハンドブック』講談社、1978年。
ミスター・パートナー編集部『中東入門書—イスラエル、レバノン、シリア、ヨルダン』星雲社、1999年。
宮田 律『イスラームでニュースを読む』自由国民社、2000年。
宮田 律『現代イスラームの潮流』集英社新書、2001年。
宮田 律『完全図解！ よくわかる「今のイスラーム」』集英社、2001年。
牟田口義郎『アラビアのロレンスを求めて—アラブ・イスラエル紛争前夜を行く』中公新書、1999年。
牟田口義郎『食の起源—メソポタミアとイスラーム』れんが書房新社、1999年。
山内昌行『イスラームと世界史』ちくま新書、1999年。

1. 米国同時多発テロと中東

9月11日、「米国同時多発テロ」事件が起きた。米国東海岸の大都市①ニュー・ヨークの世界貿易センタービルと、首都②ワシントンにある国防総省（ペンタゴン）に、ハイジャックされた旅客機3機が衝突炎上し、たくさんの死者が出たのである（さらに1機がピッツバーグ近郊に墜落）。米国は、犯行グループを、オサマ・ビン・ラディン氏が率いるイスラム原理主義過激派グループの③アルカイダと特定した。

オサマ・ビン・ラディン氏は、現在、西アジア（中東）の④アフガニスタンという国に潜伏している、と見られている。④の国を実効支配しているのは、イスラム原理主義グループの⑤タリバンである。米国は④に対し、オサマ・ビン・ラディン氏の引渡しを要求するとともに、東隣の国⑥パキスタンの協力を得て、軍事攻撃の準備を始めている。

2. 背後にあるパレスチナ問題

なぜ、米国がテロの標的になったのだろうか？ この問題の背後には、パレスチナ問題がある。

現在、イスラエルがある地域を⑦パレスチナと呼ぶ。大昔、⑦には⑧ユダヤ人（ユダヤ教徒）が住んでいた。しかし、⑧人の王国は、70年にローマ帝国に滅ぼされてしまった。以来、⑧人は「離散の民」として全世界に散らばった。なお、これの少し前、⑦にイエスが誕生し、⑨キリスト教を広め始めた（イエスは30年頃処刑）。

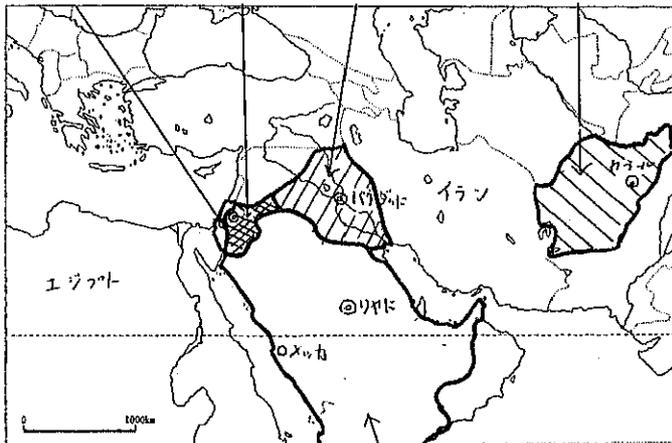
その後、⑦には別の民族が住みついた。その後7世紀に、アラビア半島（現在の⑩サウジアラビア国）にイスラム教が誕生した。その後、イスラム教は、アラビア半島と周辺に広まった。中東地域に暮らすイスラム教徒のことを、アラブ人と呼ぶ。特にパレスチナに暮らすアラブ人を⑪パレスチナ人と呼ぶ。

第1次世界大戦（1914年～1918年）当時、パレスチナ一帯は、オスマン帝国（トルコ）の領土であったが、戦後、イギリスやフランスの委任統治領となった（1921年、アラブ人の自治政府として、⑫トランス・ヨルダンが誕生した）。

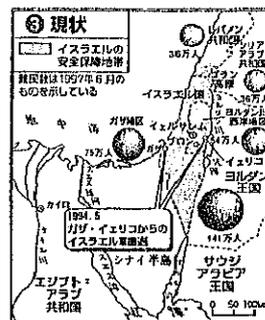
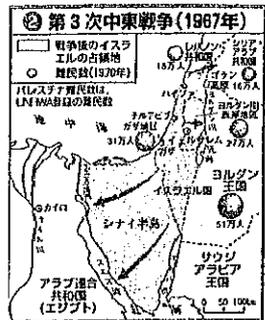
第2次世界大戦中、⑬ユダヤ人の多くが、ナチス・ドイツにより迫害されたこともあり、戦後、⑦パレスチナにユダヤ人国家を建国する運動が盛り上がった⑭（シオニズム運動）。大量の⑬ユダヤ人がパレスチナに押し寄せて、⑮イスラエルを建国したため、そこに暮らしていた⑪パレスチナ人や周辺のアラブ諸国との戦争が起きた。これを⑯中東戦争という（第1次〔1948～49〕～第4次〔1973〕）。いずれの戦争も⑮イスラエルが勝利した。多くの⑪人が難民となり周辺諸国で現在も暮らしている。また⑮を支援しているため、多くのアラブ人が米国を敵視する傾向が強い。

昨年、9月28日、イスラエルのシャロン氏（現首相）が、首都エルサレムにあるイスラム教の聖地への訪問を強行したことをきっかけに、イスラエル軍とイスラエル在住のパレスチナ住民との衝突が激化（これを民衆蜂起（⑰インティファダ）と呼ぶ）しており、これまでに双方の死者は800人を超えている。

- B. 国名【イスラエル】 首都【エルサレム】
 A. 国名【ヨルダン】 首都【アンマン】
 D. 国名【イラク】 湾岸戦争（1991）を起したフセイン大統領
 C. 国名【アフガニスタン】 タリバンが実効支配



E. 国名【サウジアラビア】イスラム教の発祥の地



ヨルダン



プリントNo.2

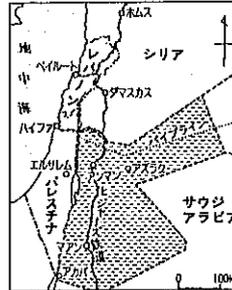
ヨルダンとはどんな国と思うか？

Blank space for writing an answer to the question.



顔で表現

元々のイメージが、パレスチナ人のイメージと異なると感じた。パレスチナ人のイメージは、顔に髭を生やしている人、頭巾をかぶっている人、といったイメージが強い。今回の写真からは、顔に髭を生やしている人、頭巾をかぶっている人、といったイメージが弱く、むしろ、顔に髭を生やしている人、頭巾をかぶっている人、といったイメージが強い。



昔のヨルダン

パレスチナ人、3人死亡
エルサレム自治圏 クサ・モスクで銃撃
イスラエル自治圏の集約地であった。イ
スラエル自治圏内には、イ
ンティファダ（民衆反
乱）が始まって1周年
と厳戒態勢をとったが、
衝突は各地に広がり、
ヨルダン川西岸ではパレ
イスラム教聖地—アル
スチナ人3人が死

インティファダの終
つがはなかったのは、イ
スラエルのシヤロン・リ
クイム警官（自衛隊）に
ま、モスクがある「神
殿の丘」への訪問地。若
者の死、その死
40人以上に達し、若者
を神廟の丘周辺から排除
した。また、西岸地域か
らエルサレムへの通行も
禁止。このため、多くの
若者が市街の路上で死
亡した。

隣国イスラエルの現在

組 番 氏名

※プリントNo.3はP36に掲載。

プリントNo.4

ビデオ①「素顔のヨルダン」ワークシート

1. ビデオの内容（映像から何がわかったか？）
2. 自分のイメージとのギャップ（自分の予想したヨルダンとの違い）
3. 疑問に思ったこと。
4. 感想

組 番 氏名

プリントNo.5

1. イスラム教について

(1) イスラム教は、世界宗教の1つ。

- ①キリスト教 (約15億人)。
- ②イスラム教 (約13億人)。←毎年度十万人規模で拡大中。
- ③ヒンドゥー教 (約7億人:インド)。
- ④仏教 (約3.3億人)。
- ※ユダヤ教 (イスラエルに600万人)。

(2) イスラム教とは?←「アッラーの他に神なし。ムハンマドはその予言者なり。」を信じる。

- ①唯一神アッラーを信仰する宗教。←人は昏、神の下に平等。
- ②予言者はムハンマド。(「最後にして最大の予言者」)

※イスラム教では、予言者モーセ (旧約聖書、ユダヤ教) や予言者イエス (新約聖書、キリスト教) も認めている。だから、イスラム教徒は、ユダヤ教徒やキリスト教徒を「啓典の民」(同じ神を信じる仲間) として認めている。

- ③イスラム教の聖典がコーラン。←「神の言葉」をムハンマドが語ったもの。

※イスラム教では、聖典「コーラン」の解釈が分かれている。

例: 厳しい教え。穏やかな教え。イスラム教の指導者の力が強い。

※守るべきことが全てこれに書かれている。←アラビア語で書かれている。

※いろんな宗派に分かれている。←多数派がスンナ派 (9割)。イランはシーア派。

- ④イスラム教徒のことをムスリムと呼ぶ(「神に帰依する人々」という意味)。

【主なきまり】

- ①酒×。←酔いつぶれるのはよくない。
- ②ぶた肉×。←牛肉や鶏肉も、ムスリムによって定められた屠殺法によらねば×。

- ③1日5回のお祈り (サラート)。

④1か月間の断食=ラマダン。←日の出から日没までの飲食禁止 (夜は宴会)。

⑤偶像崇拜の禁止。←神そのものを信仰すべし。神の絵や像を造ることの禁止。

⑥聖地メッカへの巡礼。←サウジアラビアにある聖地へ行くのが夢。

⑦女性は人前では顔や身体を見せない。←性欲は信仰の妨げ。

⑧男は外で仕事、女は家で家事という考え方が強い。

⑨貧しい人を助ける。

⑩利子をとらない。賭け事をしない。

【「イスラム教」と「原理主義」と「過激派」の区別】

「イスラム教」…「イスラム」の語源「サラーム」は平和を意味する。テロリズムとは関係ない。

・原理主義…世俗化した最近の宗教状況を批判し、「基本にもどろう。」という宗教運動。

・過激派…テロ活動など暴力により、自分たちの考えを通そうとするグループ。

例:アルカイダ。

※ジハード (聖戦) …本来の意味は、「自分の欲望と対決し、真面目に信仰する気持ちを持ちつづけようという気持ち。転じて、「信仰を妨げる者がいれば、神のため命を捨てて戦え!」「死ねば、天国に行けるぞ!」という意味に使われている。

組 番 氏名



プリントNo.6

ビデオ②「ヨルダンのTV番組」ワークシート

1. ビデオの内容 (映像から何がわかったか?)

2. 自分のイメージとのギャップ (自分の予想したヨルダンとの違い)

3. 疑問に思ったこと。(今日の授業を含めて)

4. 感想 (今日の授業を含めて)

組 番 氏名



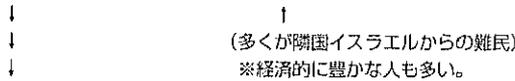
プリントNo.7

ヨルダン (ヨルダン・ハシミテ王国) の情報

データ⇒首都⇒①アンマン。(7つの丘に囲まれたすり鉢状の地形の町)。
 面積⇒8万9556km²。日本の約4分の1⇒②北海道の1.3倍。
 地形⇒ヨルダン川と死海の東岸に切り立って東に延びた乾燥した台地。
 (-397m) (610~915m)

気候⇒国土の95%が③砂漠。砂漠気候で夏は40℃を超える(湿度が低く汗かかない)。
 四季がある(4月~9月が夏で乾季、10月~3月が秋、冬、春で雨季)。
 アンマンの夏の平均気温は26℃としのぎやすい。アンマンは冬に雪も降る。

民族⇒④ベドウィン系アラブ人約30%、⑤パレスチナ人約70%。



※ベドウィン⇒砂漠に住むアラブ系遊牧民族。テントに住み、羊、ヤギ、ラクダ等の遊牧をしている。
 近年では、定住しながら季節によって遊牧を行なうスタイルに変わりつつある。

人口⇒470万人。←このうち⑥4分の1(約120万人)がアンマンに住む。
 ↓
 ・都市部に住む人の割合は73%(1998年推計)。

この50年間で10倍に人口増加。
 人口増加の主な理由⇒⑦パレスチナの増加。
 ※現在の人口増加率は2.97%(2000年推計)とまだ高い。

都市の「人口過密」と「人口爆発」

宗教⇒イスラム教徒(ムスリム)⑧95%、キリスト教徒⑨5%。

※キリスト教の女性は、ベールを着なくてよい。
 ※ムスリム男性は、キリスト教やユダヤ教の女性と結婚できる。

でもムスリム女性は、異教徒とは結婚できない。
 政治⇒立憲君主制、⑩国王に強い権限。国王はイスラム教の開祖ミハンマドの直系。
 (国会のうち上院40議席は国王が任命。下院80議席は選挙。)

1999年2月にフセイン国王が死去。長男アブドラ2世が新国王。

司法⇒最高、高等、地方裁判所のほかに⑪宗教裁判所がある。

※イスラム法による判決を望む市民のため、結婚や離婚の事例を判決する。

言語⇒⑫アラビア語。←右から左へ書く。

通貨単位⇒ヨルダン・ディナール(JD)。

1JD=約177円(2001年夏、空港の銀行で両替)。

1USD=120円として計算)。

ビッグマックは、1.59JD=⑬約281円。

ビザ(査証)⇒観光ビザは日本国籍の場合は無料。有効期間は1年。

経済⇒貿易赤字を湾岸産油国からの財政援助と国外出稼ぎ労働者からの送金で補っている。

・GDP(⑭国内総生産)は76億ドル(1999年)。

・1人あたりGDPは1620ドル(89位)

←日本は6位(29930ドル)(1998年)。

産油国でないため、経済が苦しい。

識字率⇒89.8%(男94.9%、女84.4%)(90位)(2000年)

乳児死亡率⇒1000人中32人(97位)。

←1位はアフガニスタン(138人)。(2000年) 日本は188位(4人)。



ヨルダン国王夫妻



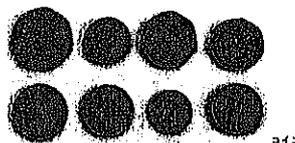
ジョルダンのお金 (Jordan Dinar)



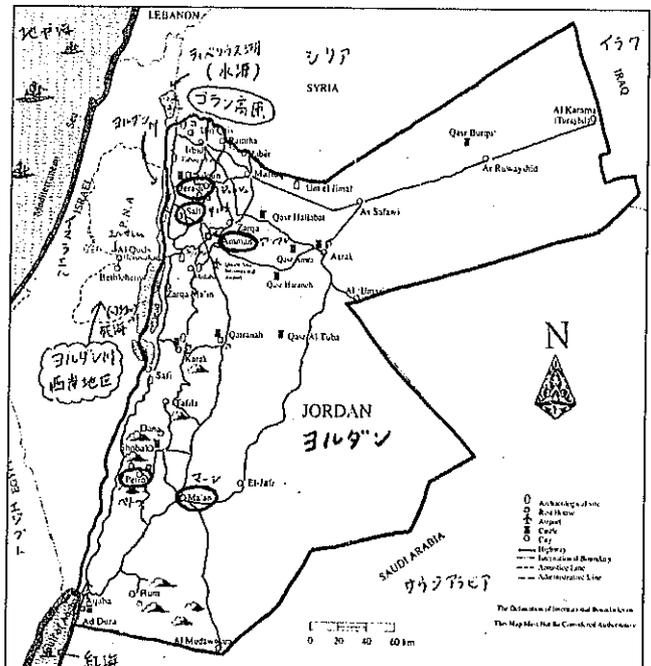
現国王 アブドラ2世 60 JD



前国王 フセイン 20 JD



1 JD = 1000 Fils = 100 Piaster (100 Qirah)
 上段左から: 1 JD, 1 JD, Half JD, Quarter JD
 下段左から: 10 Piasters, 5 Piasters, 2.5 Piasters, 1 Qirah



異文化理解は難しいーヨルダンに関する感想から

1. 「なんで犬が嫌われているのかわからない。」

答え：宗教的理由。イスラム教では犬は不浄とされている。
豚を食べないのも宗教的理由。左手も不浄。

2. 「ヨルダンのイスラム教は、きびしいのか、いい加減なのかわからない。」

答え：ヨルダンのイスラム教は、寛容といえる。
お酒も人前で大っぴらに飲まなければいいし、服装についてもきびしくない。
隣のサウジアラビアが、すごくきびしいのと対比的。

3. 「ラマダン（1ヶ月の絶食月）って大変では？」

答え：イスラム教の習慣。絶食といっても日出前と日没後は食べて良い。妊婦とか病人は、やらなくてよい。
仕事は停滞する。郵便物も遅れる。
「のどを乾かせて、腹をすかせて我慢した後、食べたり飲んだりするのは楽しいでしょ。」

4. 「ヨルダンのTV番組は、欧米や日本の真似ばかり？」

答え：欧米の文化は、世界中に広がっている。日本も欧米の真似ばかりしてきたのでは？
例：マクドナルド、USJ、洋服、J-POPS

異文化理解のポイント：自文化中心主義を捨てる。(日本人の基準でものを見ない。)
相手の立場で物を見る＝「文化相対主義」。

〈異文化理解には誤解がつきもの〉

- ・ヨルダンは危険だ。←ウソ！ 治安がよく、夜の一人歩きも男性なら大丈夫。
- ・ヨルダンのTV番組では日本や欧米のアニメなどやっていない。←ウソ！
- ・ヨルダンの女の人は全員、ベールをかぶっている。←ウソ！

〈ヨルダン人の日本のイメージ〉

1. あなたの予想 (5つ)

2. ペトラの子どもの答え (5つ)

3. ヨルダンのある学校で教えられたウソ

〈今日の授業の感想／質問〉

組 番 氏名





プリントNo.9

1. 情報不足による思いこみが「誤解」を生む？

例1：ヨルダンの民族衣装を着て、廊下を歩いたら「タバリン」と言われた。
ヨルダンの民族衣装とアフガニスタンの民族衣装は同じか？
()

例2：米国で、頭にターバンを巻いていたシーク教徒のインド人が、イスラム原理主義の過激派と間違われ射殺された。
「誤解」が引き起こした悲劇？

例3：「日本人は目が細い」というのは正しいか？
このようなものの見方を()と呼ぶ。

例4：「日本に原爆が落ちた」という知識と、「日本人は目が細い」というステレオタイプのものの見方（誤解）を、単純に結びつけて、「日本人の目が細いのは、日本に原爆が落ちたからだ。」という、さらなる誤解が生じた。

2. 「日本とヨルダンの新聞記事を比べよう」

ヨルダンの新聞記事

--

日本の新聞記事

--

・同じ日の新聞でも、載っている情報は違う。

3. 重層的（多面的）で動的（変化）に文化を理解しよう

日本

グローバル化の影響（現代）	
近代化の影響	
日本の伝統文化	
東アジアの伝統文化	

ヨルダン

グローバル化の影響（現代）	
近代化の影響	
日本の伝統文化	
西アジアの伝統文化	

・文化は相互に影響して変化していくのでは？

4. ヨルダンは、それほど困っていない国なのに、なぜ、援助をするのか？

5. どんな援助をしているのか？

6. ヨルダンの抱える問題？

JICA（国際協力事業団）…日本の内容

年齢	20歳			30歳		40歳		50歳		60歳		
	(中学校生活) (高校生活) (大学生生活)			社会人								
JICAの 募集内容 JICAは こんなことを 募集しています	中学生エッセイ コンテスト	高校生エッセイ コンテスト	大学生論文 コンテスト	青年海外協力隊 (JOCV) 募集対象年齢 (20才～39才)				シニア海外ボランティア 募集対象年齢 (40才～69才)				
	(個別) 専門家登録可能年齢 (30才～60才)											
	日系社会青年ボランティア 募集対象年齢 (20才～39才)				日系社会シニアボランティア 募集対象年齢 (40才～69才)							
	ジュニア専門員 募集対象年齢 (25才～35才)				国際協力専門員 募集対象年齢 (35才～60才)							
	青年招へい合宿セミナー 参加対象年齢 (20代後半～40才)											
	(先生方には中学教師・高校教師海外研修)											

プリントNo.10

〈まとめのワークシート〉

1. ヨルダンの人に日本について紹介して下さい。

2. 日本の人にヨルダンについて紹介して下さい。

組 番 氏名



世界の貧困問題を考える —マラウイを事例として—

SHIGEFUMI NAGATA

永田成文

地歴・公民

広島県立三原東高等学校

カリキュラム案

■実践の目的

授業の中に、マラウイを事例として世界の南北問題について考える開発教育の視点と南アフリカ地域の生活文化の特色を理解するという異文化理解の視点の2つを組み込む。

開発教育の視点では、マラウイの貧困問題について、その解決方法を考えていくことを目的としている。まず、第1段階として貧困の実態を把握させ、貧困の原因を究明させる。第2段階で、貧困の原因から、マラウイで現実に可能な対策を考えていく。第1段階では生徒が思考を働かせるために、予想(仮説設定)→資料収集→分析→結論の課題解決学習の過程をとる。第2段階では、解決方法をクラス全体で構造化するために、クラス全体でランキングの手法を用いて解決方法を考える。

異文化理解の視点では、マラウイの生活文化について、南アフリカ特有の特色をつかむことを目的としている。生活文化を理解する手だてとして、予想、教師による現地調査、予想検証という過程をとる。この過程で、裸、焼畑、野生生物等のみの生徒によるアフリカに対するステレオタイプ的見方を変えていく。

授業の方法

生徒が考えた貧困の原因や生活文化の予想を出させ、それを教師の現地調査(研修)で検証するために、前半2時間は研修前に授業をした。教師の異文化体験

を生で伝えるため、写真・ビデオを可能な限り録り、イメージが新鮮なうちに異文化に絞って毎日「異文化体験記」として書いた。また、実際に生活文化に触れさせるため、民芸品を購入した。また、最貧国の実態をつかませるため、食物摂取量や1人あたりのGNP等の生徒にイメージしやすい資料を収集し、課題解決の手法を学ばせるために、生徒一人ひとりの予想を仮説に高め、仮説→分析→結論の課題解決の過程を体験させた。生徒の考えは次の時間のワークシートに取り入れ、クラス全体で考えていくようにした。

研修の成果を地理選択者だけでなく全校生徒に伝えるために文化祭でマラウイ展を開き、マラウイアンを招待して、マラウイの学習を深め、国際交流を図った。最後に、クラス全員で考えた貧困問題の解決策を吟味するために、マラウイアンに尋ねるという手だてをとっている。

実践後の課題

- 5限目にマラウイを想起させるためにフォトランゲージの手法を用いたが、生活文化を検証する際に、もっと有効に活用すべきであった。
- 仮説の立て方、仮説の検証過程が十分できていないので、今後別の課題を用いて課題解決学習に取り組んでいく必要がある。
- マラウイは最貧国であるというイメージに縛られすぎたため、現地調査では貧困状況を追い求め、マラウイの近代的な部分をありのままに受け止めることができなかった。

授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目 派遣前 「マラウイってどんな国！」 ○マラウイの基礎情報を習得させ、生活文化を予想させる	○マラウイと日本との政治・経済・文化比較 ○マラウイの人々の暮らしの予想	○ワークシート ○地図帳
2時限目 派遣前 「マラウイのどこが問題なの？」 ○マラウイの経済状態から学習課題を設定し、予想させる	○マラウイの経済実態 ○マラウイがアフリカの中でも最貧国であり続けている原因（問題点）	○ワークシート ○地図帳
3時限目 派遣後 「マラウイはこんな国でした！」 ○マラウイの生活文化の予想を現地調査（異文化体験記・スライド）により検証させる	○異文化体験記やスライドによるマラウイの生活文化の把握 ○マラウイはどんな点で最貧国なのか	○異文化体験記 ○スライド
4時限目 派遣後 「最貧国マラウイ」 ○最貧国たる原因の予想を仮説に高めて分析させる	○仮説設定の方法の把握 ○資料から仮説を分析し、それぞれの仮説に結論を出す	○ワークシート ○仮説関連資料
特設 「地理マラウイ展開催」 ○マラウイ学習を深める ○全校へ国際理解教育を進展させる	○学習発表（4時間分） ○写真展示 ○ビデオ上映 ○民芸品展示 ○マラウィアンとの交流	○ワークシート ○エッセイコンテスト応募品 ○写真 ○ビデオ ○民芸品 ○マラウィアン招聘（留学生）
5時限目 解決策 「最貧国からの脱出inマラウイ」 ○4限目の分析－結論の過程を吟味し、マラウイの貧困問題の解決策を考える	○フォトランゲージ ○分析－結論の吟味 ○解決策（個人） ○解決策（クラス全体）	○マラウイ写真 ○文化祭の写真 ○ワークシート ○数字①～⑨

○文化祭に実際にマラウイの方に来てもらい、交流し、解決策を吟味してもらうという手だてをとることにより、それがマラウイで本当に役立って欲しいという願いが込められるなど生徒の貧困問題に対する意識が高まった。

○マラウイの貧困問題の解決策では、貧困の原因を仮説・検証・結果という探求過程を経ていたため、解

決策がやすかった。また、長期的に見て、実行可能な解決策と限定したことで、クラス全体の意見としてまとめることができた。

○ランキングという手法をとることによって、自分たちの意見をクラス全体の意見に構造化することができ、2時間目の最貧国の原因を予想する場面に比べて着実に生徒の思考力が高まった。

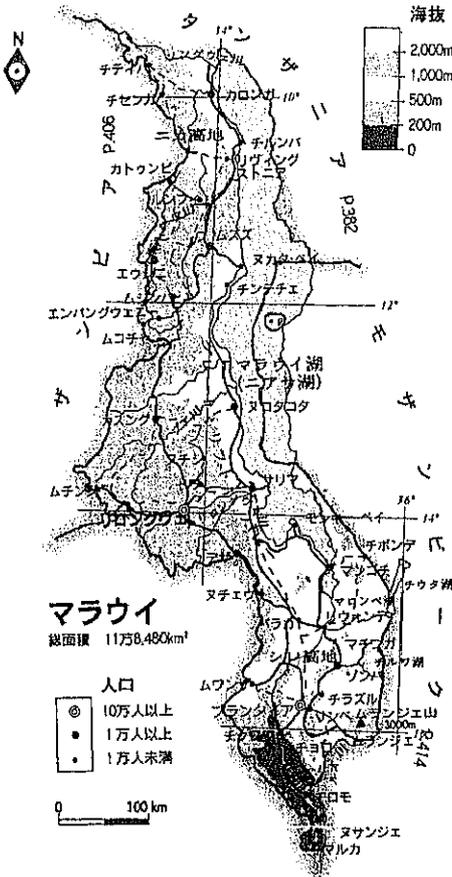


(月/日) マラウイってどんな国 2年組

作業1 《マラウイを知る》

位置:	面積:
気候:	人口:
独立年:	首都:

地図1 《マラウイ》



資料1 《日本とマラウイの比較》

日本 産業人口比率(1次: 2次: 3次:

<p>○国 土</p> <ul style="list-style-type: none"> 面積: 37万7,837 km² 首都: 東京 <p>○政 治</p> <ul style="list-style-type: none"> 政体: 立憲君主制 (元首についての明文規定はないが、対外的には天皇が元首の職いを受けている) <p>○経 済</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料収支 (1997年) 輸出=599,380億円 (対前年比13.9%増) 輸入=499,562億円 (対前年比7.8%増) 主要貿易品 輸出=農産物 (47.5%) 自動車 (14.0%) 情報機械 (4.8%) 鉄鋼 (3.8%) 自動車部品 (3.5%) 繊維製品 (2.4%) 輸入=機械 (21.1%) 石油 (12.3%) 次亜 (4.0%) 食料品 (4.5%) 化学ガス (4.0%) 木材 (2.6%) 情報機械 (2.6%) 国内総生産 (1996年): 503兆8800億円 (世界第2位) 	<p>○国 民</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人あたりの国内総生産 (1996年): 359.7万円 総国民所得 (1996年): +1.5% 日本の主要貿易相手国 (1997年) 輸出=アメリカ (21.8%) 台湾 (6.5%) 香港 (6.5%) 韓国 (6.2%) 中国 (6.2%) シンガポール (4.8%) ドイツ (4.3%) タイ (3.5%) 輸入=アメリカ (22.3%) 中国 (12.4%) 韓国 (4.3%) インドネシア (4.3%) オーストラリア (4.3%) 台湾 (3.7%) ドイツ (3.7%) アラブ首長国 (3.6%) 国定予算 (1998年): 77兆5,632億円 (当初予算額) <p>○国 民</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口: 1億2,616万5,000人 (1997年10月1日、総務庁統計局推計) 人口増加率 (1996-97年): 1.6% 平均寿命 (1996年): 男77.01歳 女83.59歳 合計特殊出生率 (1996年): 1.43人
---	---

マラウイ 産業人口比率(1次: 2次: 3次:

<p>○国 土</p> <ul style="list-style-type: none"> 面積: 11万8,484 km² (日本の約0.3倍) 首都: リロンゲウェ <p>○政 治</p> <ul style="list-style-type: none"> 政体: 大統領を元首とする共和制 独立年: 1964年 (イギリスより) <p>○経 済</p> <ul style="list-style-type: none"> 通貨: クワチ 資料収支 (1995年) 輸出=1兆15,337クワチ (1997.3月) 輸入=5,339クワチ 主要貿易品 輸出 (1996年) = 茶葉、タバコ、砂糖、茶 輸入 (1996年) = 機械、自動車、石油製品 一人あたりの国民総生産 (1996年): 170ドル 	<p>○国 民</p> <ul style="list-style-type: none"> 経済成長率 (1985-95年): -0.7% 日本の主要貿易品 (1995年) 輸出=タバコ 輸入=トランス、薬用車、自転車、その他の走行車、医薬品 <p>○国 民</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口 (1995年): 975万8,000人 民族構成: イングー族のチチュワ族、ロンゲウェ族(中津部)、ニヤ族(南津部)、ツツツ族、マコング族(北部) 言語: 英語、チチュワ語(以上公用語) 宗教: 伝統宗教、キリスト教、イスラム教 人口増加率 (1990-96年): 3.3% 平均寿命 (1992-97年): 男47歳 女47歳 合計特殊出生率 (1993年): 7.1人
--	--

資料2 《マラウイトピック》

【地理的風土】
 アフリカ大陸東南部に位置し、大地溝帯(グレート・リフト・バレー)の南端にある。国土の約5分の1がアフリカ第3の湖マラウイ湖とその湖畔となっており、マラウイ湖の西及び南側は台地状となっている南北細長い内陸国である。気候はほぼ熱帯サバナ気候に属す。

【国の成り立ち】
 植民地となるまでは、マラウイは、マラビ帝国を形成していた。マラビとはチチュワ語の「茨」という意味で、マラウイ湖の広がる湖面にちなんだものとされる。19世紀半ば、リビングストンのアフリカ探検によってヨーロッパに紹介され、その後イギリスやポルトガルなどヨーロッパ人が進出した。1891年イギリスの保護領となり、1907年からニアザランドという名で呼ばれた。第二次世界大戦後の1953年、イギリスは南ローデシア(現ジンバブエ)、北ローデシア(現ザンビア)とともに中央アフリカ連邦を結成したが、反英運動が起こり、1964年イギリス連邦の一員として独立し、1966年イギリス連邦内の共和国となった。独立以来大統領として「アフリカ最後の独裁者」とよばれていたバン

グ大統領は、内政面では独裁政治をとり反対派を弾圧したが、外交面では新西欧の自由主義路線をとった。そのため、期間に経済は発展し、政情も安定している。1994年、複数政党制導入の大統領・議会選挙が行われ、バング大統領は敗北し、統一民主戦線のムルジ党首が当選した。

【経済と生活】
 国民の約80%以上が農業に従事し、政府は農産開発重点政策をとり、小規模な農業を営む農民と、国家レベルの大規模農業を営む農民が存在する。マラウイ湖での漁業も盛んであり、チンピアという魚などを、わずかではあるが近隣のザンビアやジンバブエなどに輸出しており、食糧は基本的に自給している。水力発電によるエネルギー開発なども行っており、経済政策は一応成功している。主食は、シマ(ケニヤやザンビアではウガリと呼ばれるメイズやトウモロコシの粉を練って調理したもの)で、魚や豆のシチューと組み合わせる。バング大統領の政策を反映し、猿的的な風俗は禁止され、旅行者でも最近まで女性のノースリーブスラックス、男性も長髪では入国できなかった。

出典「世界の国々」トドグイト 明石図書発行

作業2 《マラウイの人々の暮らし》

<p>衣服:</p> <p>.....</p>
<p>食事:</p> <p>.....</p>
<p>住居:</p> <p>.....</p>
<p>教育:</p> <p>.....</p>

<p>交通:</p> <p>.....</p>
<p>通信:</p> <p>.....</p>
<p>():</p> <p>.....</p>
<p>本日の学習の感想</p> <p>.....</p>

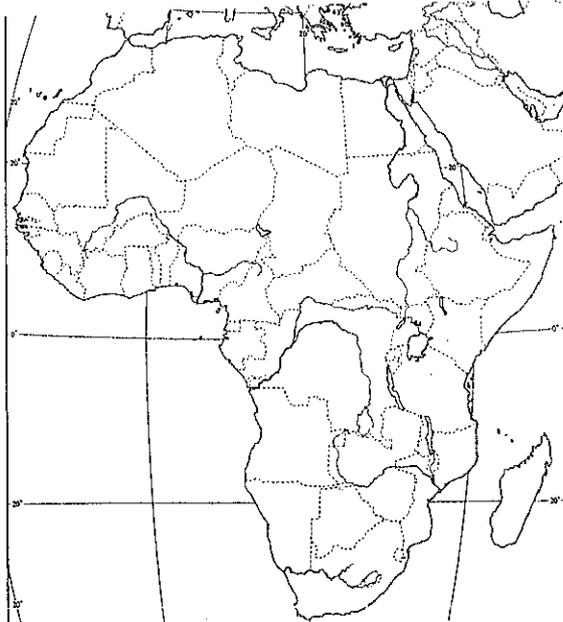
資料2

(月/日) マラウイの何が問題なの? 2年組番【 】

作業1 (アフリカの飢えを考える)

下に示した1人あたりのカロリー摂取量(1日)が2000kcal
未満の国を地図の中に塗り込め。 ※参考: 米 3600/日 2800kcal

- ・アンゴラ・エチオピア・エリトリア・ザンビア
- ・シエラレオネ・ジブチ・ソマリア・チャド・中央アフリカ
- ・ブルンジ・マラウイ・モザンビーク・リベリア・ルワンダ

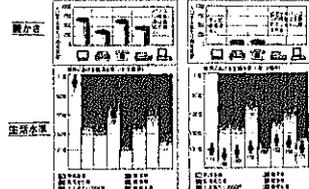


作業2 (1人当たりのGNP)

右に示した国々の1人当たりのGNPを調べよう。

単位	アフリカ	マラウイ	インド	アフリカ	シエラレ
ド	2000	7000	1000	5000	7000
ル	7000	1000	1000	1000	日本

資料1 (日本とマラウイの生活の比較)



作業1・2の結果より
マラウイはアフリカの
中でも()国
であることがいえる。

予想1 マラウイがアフリカの中でも()国であり続
ている原因(問題点)はなんだろうか。それは何を調べ
ばうづげができるだろうか。予想を3つしてみよう。

	原因(問題点)	資料等
予想1		
予想2		
予想3		

もっと知りたいマラウイ!! (学習したこと以外で)

資料3

(月/日) 最貧国マラウイ 2年組番【 】

○マラウイがアフリカの中でも最貧国であり続けている原因(問題点)はなんだろうか。
「マラウイのどこが問題なの?」の予想を吟味してみよう!!
追求する価値が非常にあり。追求してみても()関係ないのでは△。関係なし。

ポイント	予想	吟味	吟味の理由
31	・貿易量が少ない		
10	・土地が農業に適さない		
17	・食糧が少ない		
17	・人口が少ないから		
14	・田舎民地		
13	・気候が農産物生産に不適だから		
13	・情報不足だから		
11	・特産物がないから		
10	・小さい国だから		
0	・技術が不足しているから		
8	・工業化が遅れているから		
8	・人口が多いから		
7	・食糧が足りないから		
6	・位置が悪いから		
5	・仕事がないから		
5	・紛争が多い地域だから		
4	・古い国だから		
4	・就学率が低いから		
3	・食糧不足だから		
3	・政治が下手だから		

※予想1を3ポイント、予想2を2ポイント、予想3を1ポイントとして計算。
3ポイント以上のみ表示。

○予想から仮説へ

君たちの回答は予想にすぎない。仮説とは、ある事実に合理的に体系づけて説明するた
めに仮に立てた説で、説明するための資料が必要である。君たちの主な予想を仮説の形
で表すと次のような本の柱になるだろう。

仮説1: 特産物がないから、貿易量がのびずに外貨が稼げないのではない。
→輸出用農作物をあまり作っていないのではない
→輸出用工業製品をあまり作っていないのではない
→資源が少ないので、資源収入が少ないのではない

仮説2: 食糧が不足しているの、人々が貧乏の生活に困っているのではない。
→土地が農業に不適なので、作物が育たないのではない。
→気候が農業に不適なので、作物が育たないのではない。
→紛争が多いので、飢民となり食糧に困っているのではない。

仮説3: 工業化が進んでいないので、商業も発達せずGNPがのびないのではない。
→工業化が進んでいないので、仕事がないのではない
→工業化を進める情報化が遅れているのではない
→就学率が低いので工業技術者が育たないのではない

○分析から結論へ

仮説検証後は、資料収集→分析→結論の過程をたどることになる。手持ちの資料や先生
の集めた資料(表)から分析し、結論を出してみよう!!

仮説	分析	結論
特産物がないから、貿易量がのびずに外貨が稼げないのではない。 食糧が不足しているの、人々が貧乏の生活に困っているのではない。 工業化が進んでいないので、商業も発達せずGNPがのびないのではない。		

※最貧国マラウイへのメッセージを書こう!!

JICAエッセイコンテスト2001募集中心校内締め切り印:10/月





資料3補足資料

補足資料※本当は自分で探すのですよ!!

Livestock, Crops

Industry, Power and Trade Malawi

表1-1 主要国・地域の経済指標 (2000年)

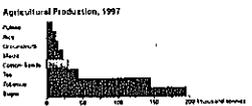
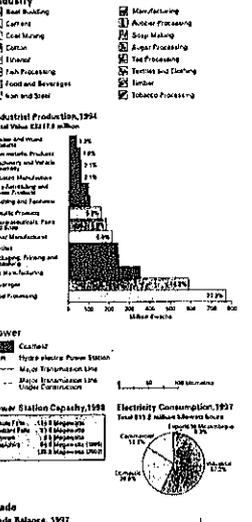
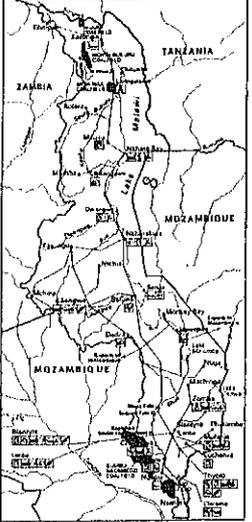
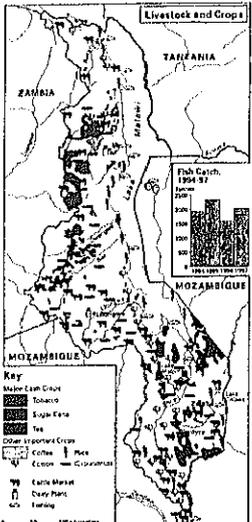
Country/Region	Year	GDP (100億ドル)	Per Capita GDP (ドル)	Population (百万人)	Urban Pop. (%)	Life Exp. (年)	Inf. Exp. (年)
Malawi	2000	1,100	100	11.0	40	50	55
Zambia	2000	1,200	150	8.0	50	55	60
Tanzania	2000	1,500	120	12.5	45	50	55
Mozambique	2000	1,800	100	18.0	40	45	50

表1-2 主要国・地域の経済指標 (2001年)

Country/Region	Year	GDP (100億ドル)	Per Capita GDP (ドル)	Population (百万人)	Urban Pop. (%)	Life Exp. (年)	Inf. Exp. (年)
Malawi	2001	1,150	105	11.0	40	50	55
Zambia	2001	1,250	155	8.0	50	55	60
Tanzania	2001	1,550	125	12.5	45	50	55
Mozambique	2001	1,850	105	18.0	40	45	50

表1-3 主要国・地域の経済指標 (2002年)

Country/Region	Year	GDP (100億ドル)	Per Capita GDP (ドル)	Population (百万人)	Urban Pop. (%)	Life Exp. (年)	Inf. Exp. (年)
Malawi	2002	1,200	110	11.0	40	50	55
Zambia	2002	1,300	160	8.0	50	55	60
Tanzania	2002	1,600	130	12.5	45	50	55
Mozambique	2002	1,900	110	18.0	40	45	50



参考資料: A New Mammillan School Atlas for MALAWI pp.14~15
 国際連合世界開発年鑑 1997 pp55~65, pp143~149, pp225~252
 ※帝國書院新詳高等地図 31.32.78.85.87.89.121.122 を参照のこと

資料4

(月/日) 貧困からの脱出 in マラウイ

○マオンガさんからのメールを読もう!!

件名: Nice Time!
 日時: 2001年11月1日 10:16

Nagata Sensei,
 Hello. How are you? Hope your job is going on well. I am fine too. I just wanted to thank you for inviting us to Mbarra Highash High School Festival. It was nice time and I personally enjoyed talking with your students and members of staff. I hope to keep in touch with you. Should there be any need for us you can notify us any time.
 Once again, thanks a lot. See you later.
 Maonga

○マラウイの最貧国であり続けている原因(問題点)の集計結果(3名)と吟味

仮説1: 特産物が少ないから、貿易量が勝手に外貨が稼げないのではないか。

全体

- 地産地消より輸出より輸入が多い → 仮説は正しい 4
- マラウイとマザは貿易量が同じ → 人口が同程度なので仮説は正しくない 3
- 輸出用工業製品をあまり作っていないのではないかと
- 特産物があるが相場が悪い → 貿易量が少ないので、仮説は正しい 6
- 地産地消から、農作物が発達していない → 仮説は正しい 2
- どこかの国も輸出しているものが多い → 他国の作物が安いので仮説は正しい 2
- タバコやサトウキビや糖がある → 単価は安いけど特産物があり仮説は正しくない 1 3
- 輸出用工業製品をあまり作っていないのではないかと
- 貿易が少ないので、貧困が少なくていいのではないかと
- 貧困はワランだけ → 仮説は正しい 3 ※解答なし 1

仮説2: 食糧が不足しているから、人々が貧困の生活に困っているのではないか。

全体

- 地産地消から食料を確保してもらっている → 仮説は正しい 4
- 食糧を輸入している → お金がなくて困るので仮説は正しい 2
- 食糧不足 → 仮説は正しい 1
- 生活するには十分な食糧がなく、輸出より食料輸入が多い → 仮説は正しい 1
- 地産地消より貿易自給率は70%(0.4030) → 食糧不足ではなく仮説は正しくない 1 6
- 餓死するほど困っておらずその日の食べ物はある(肉や魚) → 仮説は正しくない 6
- 先生活のより貧困の生活に出づい → 仮説は正しくない 3
- 食料を輸出しているから → 仮説は正しくない 1
- 先生の授業から食糧が不足してない → 仮説は正しくない 1
- 土地が農業に不適当なので、作物が育たないのではないかと
- 気候が農業に不適当なので、作物が育たないのではないかと
- 人口が少なくて手頃な気候が大部分である → 作物は限られていないので仮説は正しい 2
- 地産地消からサバを食糧である → サバは食糧でも作物は皆ついでで正しくない 1
- 跡かきが多いので、専従となり食糧に困っているのではないかと
- ※解答なし 1

2年組番【 】

仮説3: 工業化が進んでいないので、商業も発達せずGNPがのびないのではないか。

全体

- 地産地消から1人あたりのGNPが良い → 仮説は正しい 6
- 地産地消から、第三次産業比率が高い → 仮説は正しい 1
- 工業化が進まず輸出ができていない → 仮説は正しい 1
- 工業化は日本と変わらない → 仮説は正しくない 1
- 空想がある → 空想があるので仮説は正しくない 5
- 工業化が進んでいないので、仕事がないのではないかと
- 工業化が進んでいない → 仮説は正しい 5
- 工業関係より、食べ物関係の生産が多い → 仮説は正しい 2
- あまり発達していない → 仮説は正しい 5
- 工業は発達している → 仮説は正しくない 3
- 第三次産業の割合は高くない → 仮説は正しくない 2
- 工業化を進める情報化が盛んでいないのではないかと
- FAX設置率や携帯電話の普及率が高い → 仮説は正しい 2
- 設置率が高いので工業技術者が育たないのではないかと
- 技術を持っている人が少ない → 工業化が進まないで仮説は正しい 1
- ※解答なし 4

○どうしたらマラウイの貧困問題に解決できそうか
 -みんなの考えをマオンガさんに聞いてみよう!-

自分	5	6	7	8	9
1	5	6	7	8	9
2	5	6	7	8	9
3	5	6	7	8	9
4	5	6	7	8	9

ランキング

○マラウイの学習を通して、世界の貧困問題について考えたことを書こう

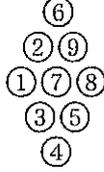
1 限目
 マラウイってどんな国
 2 限目
 マラウイのどこが問題なの
 マラウイはこんな国でした
 3 限目
 最貧国マラウイ
 4 限目
 貧困からの脱出 in マラウイ

(1) どうしたらマラウイの貧困問題が解決できると思うか
 ~みんなの考えをマオン君さんに向けてみよう!~
 2年 組 番{

○前時の集票

新4	5	食料の援助を多く
1 高価な特産物をつくる	6	若い人に技術を学ばせる
2 品種改良し、増産する	7	工業学校をつくる
3 輸入を減らし自国で生産	8	先進国に留学する
4 (鉱山を探す)	9	先進国の技術者から学ぶ

ランキング



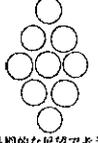
○ランキング集計結果 (変形解答を含む) ※未回答3

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
○ 第一		11		2	5	14		3	7
○○ 第二	11	13	4	4	2	14	7	11	11
○○○ 第三	17	13	15	7	7	9	17	15	17
○○ 第四	11	4	14	12	15	3	13	9	5
○ 第五	2	8	16	10			3	2	

○自分の考えの集計結果 (回答一部変更) ※未回答3

仮説1 関係: 農村から農村に技術者が移る	3
・自分でたくさん作物を作り、輸入を減らす	2
・ブランド化した高価な特産物をつくり、外貨を稼ぐ	2
・マラウイで生産できない作物を作り、外貨を稼ぐ	2
仮説2 関係: 輸入しているものを自国で生産する	2
・外国に支援を頼み、食糧の援助を増やしてもらう	1
・土地を開拓し、農作物を増産する	1
・農作物を土地や気候に合うよう品種改良し、増産する	1
・周辺国と合併して援助してもらう	1
仮説3 関係: 1国だけや2国だけ経済成長を促す	9
・若い人に技術を学ばせ、技術者を育てる	5
・先進国から技術者を招き、新しい技術を取り入れる	6
・義務教育にして、基礎知識をつける	5
・先進国に留学し、新しい技術を学んでくる	3
・工業化を進め、働き口を増やす	2
・工業学校をつくり、技術者を育てる	1
・コンピュータを多く取り入れ、情報社会を進める	1
・海外の企業を呼び込み、新しい技術を取り入れる	1

最終ランキング



○マラウイの学習を通して、世界の貧困問題について考えたことを書こう

1 題目 マラウイってどんな国 2 題目 マラウイのどこが問題なの 3 題目 マラウイはこんな国でした 4 題目 食料のマラウイ 5 題目 農村からの脱出 in マラウイ	
--	--

フォトランゲージから読みとれること集計結果

部分可写	<ul style="list-style-type: none"> ・荷物を頭の上に載せている37 ・裸足が多い34 ・女性が多い15 ・黒人14 ・レンガ造りの建物13 ・男性も女性も髪が短い12 ・女の人のみ働いている11 ・半袖の人と長袖の人9 ・手袋で頭にかけている6 ・女性はスカート5 ・8月4日5 ・後ろのかげに書いてある文字が英字っぽい2 ・かごの中はとうもろこしをひいたもの2 ・子どもがさとうきびみたいなものを食べている2 ・女性が頭に布を巻いている2 ・男性がむしやれ2 ・植物がぼろい2 ・荷物が重そう1 ・無意味1 ・身長が高い1 ・女の人のみ荷物を持っている1 ・天然パーマ1 ・家にドアがある1 ・子どもの着ている服がきれいじゃない1 ・子どものズボンが破れている1 ・窓が格子状1 ・女性は太っている1
完全可写	<ul style="list-style-type: none"> ・マラウイ22 ・暖かい国7 ・アフリカの国4 ・貧しい国1 ・日本じゃない1 ・発展途上国っぽい1 ・南アフリカの方1 ・夏1

マラウイの学習を通して、世界の貧困問題について考えたことを書くこの主な例 (原文のまま)

例1

5時間、貧困問題とマラウイについてやって、貧困国として脱出するのはすごく難しく、大変なことなんだとわかりました。脱出するには、技術を学んで工業化を進めていくことが最終的に一番大切なことなんだなあ、勉強を通して思いました。

例2

世界の中では飢えで苦しんでいる人がいるので、その人を助けるためにはまず食料援助をしてあげないといけないと思います。貧困問題を解決するには、人ごとだと考えず、一人ひとりが真剣に考えないと解決しない問題だと思いました。

例3

やっぱり貧困問題を解決するために改良する点はたくさんあると思うけど、それを実現することはなかなか難しいんだろうなあと思った。でも、ちょっとずつでも改良していけたらいいと思うから、そのために協力できることがあるなら協力したいと思った。

例4

最貧国には工業化が進んでいないという事が、だいたいどの国にもあてはまると思った。アフリカに多いけど、資源がでる国はそこまで貧困になっていないから、資源がでない国はやっぱり工業化を進めていった方がいいと思った。そのためには、知識を学ぶ場を作っていくことが大切だと思う。





グローバルな問題の解決に向け、 民主的で知的な対話のできる資質の育成

援助計画案の作成・新しいディベートを用いた比較検討の活用

TAKAFUMI KANO

鹿野 敬文

英語

福岡県立修猷館高等学校

カリキュラム案

■実践の目的

グローバル化の急速な進展に伴い、世界各地で地球規模の様々な問題が数多く発生している。これらは異なった価値観を持つ人との間に深刻な対立を引き起こす可能性があるため、協力して責任ある解決策を目指す民主的で知的な対話のできる人材育成が社会から求められている。しかし、そのための実践は日本の学校教育で殆どされていない^①。そこで今回、国際協力に関する問題を題材に新しいディベートの手法を用いて、その基礎にある(ア)～(エ)の四つの力を育てる試みを行い、効果について検討することにした。

- (ア) 問題を正しく理解し、解決に向けてのリサーチを系統的・集中的に行える力。また、集めた情報の真偽を客観的に判断できる力。
- (イ) 自分の考え及び証拠資料を論理的に、且つ一貫性あるものとしてまとめあげられる力。また、それをわかりやすく発表できる力。
- (ウ) 相手の人格を尊重しながら、相手が示した代案を冷静に検討できる力。特に、その論拠や資料について、自ら集めた情報をもとに吟味できる力。
- (エ) 客観的且つ公平に見て、自分の考えの方がより優れていることを、順序立て且つわかりやすく論証できる力。

■実践の方法

筆者が担当しているディベート部の部員に「100億円の資金をアフリカのマラウイに援助するとすれば、どのような人々を対象にしたどのようなプロジェクトを、どの

ような理由から行うのか。」というテーマで考えさせることにした。^②

まず、部員を2つのグループに分け、各々が作成した援助案のなかからより優れた方を選ばせるというトレード・オフの関係を取り入れることにした。それに伴い、試合結果を判定する際には、従来のディベートの審査基準に加え、各援助計画案について以下の項目を考慮することとした。

- (i) 日本及びマラウイの国家目標^③との整合性、
- (ii) 日本及びマラウイへの(マイナス面も含めた)短期的・長期的影響、及びマラウイ自立への貢献の度合い、
- (iii) 弱者・環境への配慮の程度、
- (iv) 成果を検証できる数値目標の有無、
- (v) 実現可能性、
- (vi) 他の援助国や援助機関との連携の度合い、
- (vii) 基礎となった情報の信頼性・妥当性・充分性

これにより、試合の審査はディベートの専門家に加えて、政府開発援助(ODA)の実務担当者にもお願いすることになった。

実践

この学校のディベート部は、平成11年以降連続して全国大会に駒を進めており、平成13年には全国優勝を果たしている。今回の実践を担ったのは、その時の優勝メンバー(1年生男子1名、2年生男子2名・女子4名、3年生女子1名)である。前述で示した(ア)～(エ)の力をより効果的に身につけさせるため、ディベートのテーマに具体性・国際性を持たせ、またトレード・

オフの関係を取り入れることにしたが、これらの効果
が従来のディベートと比較してどのようなものか判断

するには相応しいメンバーと言えよう。

① 今回の実践を通して育てたい(ア)～(エ)の4つ

■導入

表1 実践案

	具体的な活動	使用教材
導入	①大まかな流れについて説明した後、実践案を確定する。 ②新しいルールを作成させる。審査基準について説明する。	
情報収集	(a) 日本が行っている国際協力活動 ①国際貢献とは何か、何故それが必要なのか、日本が果たすべき役割とは何か、について考えさせる。 ②日本政府が現在行っている国際協力活動の種類・それぞれの役割と特徴について説明する。次に、それらの具体的な活動について理解を深めさせる。 ③NGOの種類・それぞれの役割と特徴について説明する。次に、NGOの具体的な活動について理解を深めさせる。	*「もっと知りたい「日本の国際貢献」」 ⁽⁵⁾ 【いま私たちにできること】 ⁽⁶⁾ *「現地レポート」
	(b) マラウイに関する基礎知識 ①ワールドボックスを使って、マラウイの人たちの生活の雰囲気を感じあわせる。また、マラウイで人気のあるパオ(マンカラ)の遊び方を教える。 ②平成10年度の海外研修報告書と、筆者が書いた文章とを読ませる。次に、ビデオを使って、マラウイに関する視覚的理解を深めさせる。	*ワールドボックス *パオ(マンカラ) ⁽¹⁰⁾ *「授業に役立つ開発教育教材集」 ⁽¹¹⁾ *筆者の書いた文章 ⁽¹²⁾ *佐貫誠教諭作成の25分間ビデオ
	(c) 自主的な情報収集 ③インターネットを使ってマラウイについて調べさせ、わかりにくい事柄については解説を行う。こうして得た情報をもとに、マラウイに日本が援助を行う際プラスに働く点とマイナスに働く点とを表にまとめさせる。	
投資計画案の作成	(a) 事前準備 ①JICAによる開発とマラウイとの関わりについて理解させる。次に、マラウイで実際に行われている国際協力活動を取り上げ、それらの特徴を様々な側面から明らかにさせる。 ②途上国のユニークな開発戦略を紹介する。 ③マラウイへの援助の候補分野を挙げさせる。	*JICA作成のレポート ⁽¹⁵⁾ *JICA平成13年度高校教師海外研修・マラウイ班への配付資料 *「With Your Love」
	(b) 援助計画案の作成 ①援助分野を決定させた後、部員の関心を高める工夫を行う。次に、その分野でマラウイで働いた経験のある人を学校に招く。又、援助計画の実際の立て方を専門家から教えてもらう。 ②援助計画案(即ち、ディベートで言う「立論」)を作成させる。	*NHK作成の「ETV2001」、及び朝日ニュースター作成の「地球家族」のビデオ
	(c) 他者のアドバイス ①様々な人からアドバイスをもらう。それをもとに、援助計画案に必要な修正を加えさせる。	
本試合	①2つの援助計画案のうち、どちらがより優れているのか多角的に検討させるため、ディベートの試合をJICA九州国際センターで実施する。試合後、ディベートの専門家・ODAの実務担当者・マラウイ派遣の元青年海外協力隊員から、それぞれコメントをもらう。懇親会でも有意義なアドバイスを頂く。 ②部員に対してアンケート調査・面接調査を行う。	





の力を部員に紹介した後、今後の大まかな予定について説明した。その上で、部員のアイデアを取り入れて修正を行い、表1の実践案を確定した。

- ② トレード・オフの関係を新しく取り入れたことや、ディベートにあまり馴染みのない人が数多く試合を観戦することを考慮し、全国中学・高校ディベート選手権大会ルールとエナコロジー・ディベート大会ルールをもとに、今回適用させる新しいルールを部員に作成させた。⁽⁴⁾

また、試合ではトレード・オフの関係にある2つの援助計画案の比較検討が中心になるので、その際考慮する特別の審査基準（「**実践の方法**」で示した i ~ vii）についてここで詳しく部員に説明した。

情報収集

(1) 日本が行っている国際協力活動

今回の援助計画の位置づけを正しくするには、日本が行っている国際協力活動について幅広い理解を部員が持つ必要がある。そこで、次に述べる①~③のことを行うようにした。

- ① 「もっと知りたい『日本の国際貢献』』及びそのCD-ROM⁽⁵⁾を使って、「日本の国際貢献とは何か?」「なぜ、それが必要なのか?」そして、「厳しい経済状況が続く中、日本が世界に果たすことのできる役割とは何なのか?」について改めて考えさせるようにした。
- ② 「いま私たちにできること」⁽⁶⁾を参考にまとめた表2を用いて、日本政府が現在、開発途上国に対して行っ

表2 日本の開発途上国に対する資金の流れ

政府開発援助	二国間贈与	技術協力 ⁽⁷⁾ 無償資金協力 ⁽⁸⁾
	二国間貸付	
	国際機関への出資・拠出等	
その他の政府資金の流れ	輸出信用	
	直接投資金融等	
	国際機関に対する融資等	
民間資金の流れ	輸出信用	
	直接投資	
	その他二国間証券投資等	
非営利団体による贈与	国際機関に対する融資等	

ている国際協力活動の種類・それぞれの役割と特徴について説明した。今回の試みでは政府開発援助の中の二国間贈与、特に無償資金協力が対象となるので、部員にその理解がきちんと伝わるように注意した。

- ③ 非政府組織 (NGO) が行っている活動の種類・それぞれの役割と特徴について説明した。次に、NGOが現地で実際にどのような活動をやっているのか知る一つの手がかりとして、「国際ボランティア貯金」から寄付金配分を受けている各団体の「現地レポート」⁽⁹⁾を読ませることにした。

(2) マラウイに関する基礎知識

マラウイへの援助が成果を上げるようにするには、計画立案者の中に被援助国に対する理解が十分に育っていなければならない。そこで、次に述べる①~③のことを行うようにした。

- ① 国際理解教材の一つであるワールドボックス〈What's World Box〉を青年海外協力協会 (JOCA) から取り寄せた。ワールドボックスとは、筆筒の中に入る衣装ケースに発展途上国の生活用品を入れて貸し出す国際理解教材のことで、中にはマラウイの教科書・おもちゃ・通貨・音楽カセットテープ・衣装などが入っている。また、マラウイで広く行われているパオ (マンカラ) の遊び方を部員に教え、ともにゲームを楽しんだ。幸い Alex de Voogt がまとめた国際大会の英文ルール集⁽¹⁰⁾が手に入ったので、それを使ってパオを説明することが出来た。
- ② 平成10年度高校教師海外研修でマラウイを訪問した大分県立大分商業高等学校の衛藤朋子教諭がまとめた報告書⁽¹¹⁾、及び筆者がマラウイについて書いた文⁽¹²⁾を部員に読ませた。次に、平成13年度高校教師海外研修で、筆者とともにマラウイを訪問した山口県立宇部西高等学校の佐貫誠教諭が作成した25分間のマラウイ紹介ビデオ (平成13年度 山口県自作視聴覚コンクール 特選作品) を部員に見せた。その際、ビデオを適宜止めながら解説を加え、部員のマラウイに対する視覚的理解が深まるように努めた。
- ③ インターネットを使って「マラウイ」というキーワードで検索したところ、該当するホームページが全部で1846件あることがわかった。一日40件のペースでホ

ホームページを読み、その中から参考になりそうなものだけをピックアップし、それらの内容について毎日部員に説明した。部員はこのブリーフィングを通して、マラウイへの理解（例えば、国民性はどのようなものかとか、どのようなニーズを持っているのかなど）を深めるとともに、援助計画案を立てるにはどのような情報が必要なのか、或いは情報の批判的な読み方とはどのようなものか¹³⁹等が徐々にわかっていったようである。一週間経って、部員がこの方法に慣れてきたの

で、残りのホームページの確認作業を全て部員に任せることにした。彼（女）らは約1500件のホームページを分担して読み、参考になりそうなものについての情報交換を毎日行っていた。

次に、ここまで集めた情報をもとに、マラウイに日本が援助を行う際、プラスに働くと思われる点とマイナスに働くと思われる点を部員にまとめさせた。その結果を示したのが表3である。

表3 援助に対するマラウイのプラス要因とマイナス要因

プラスに働くと思われる点	マイナスに働くと思われる点
<p>①国民性は穏健、親切で礼儀正しい。国民は紳士・淑女たるべしとの考えが浸透している。</p> <p>②日常生活に最低限必要なものは国内でまかなっている。</p> <p>③バス路線網が、全土にわたって比較的よく発達している。</p> <p>④基本的インフラとしての国際空港が2つ整備されている。</p> <p>⑤労働賃金が比較的安い。</p> <p>⑥税金の面で優遇するなど、海外からの投資がマラウイに入りやすいようにしてある。また、「アフリカ成長機会助成法（AGOA）」により、マラウイ製の生地・縫製品輸出には米国の関税がかからない等の利点がある。更に、英連邦等にも加入しており、世界市場へのアクセスが既に確保されている。</p> <p>⑦民主主義を採用している。また、国の制度の大枠は英国流で、予測可能な国家運営がされている。</p> <p>⑧公用語である英語の発音がはっきりしており、日本人にも非常に聞き取りやすい。</p>	<p>①物事の出来栄をきちっと決めようとか、整然と計画的に物事を運営していこうとか、或いは付加価値を追求して自分の作ったものの競争力を高めようとか、そういった発想が全くない。</p> <p>②援助慣れしており、「無くなればまた先進国から貰えるさ。」といった安易な考えが見られる。</p> <p>③殆どの国民が自給自足の農民であるため、税金を納めている人が少なく、国全体にお金が不足している。</p> <p>④電気が高い上に、停電・断水がよく起こる。</p> <p>⑤経済の悪化と農業の不振に伴い、最近治安が悪くなりつつある。</p>



(3) 自主的な情報収集

① (1)と(2)に関して理解を更に深めたいという要望が出されたため、より広い立場から、或いはこれまでとは違った角度から、国際協力活動やマラウイを理解するのに役立つ情報を与えてくれる機関の一覧表¹⁴⁰を部員に配付することにした。特に、駐日マラウイ大使館には、今回のプロジェクトの概要を説明した上で、部員の情報収集・質問への回答に関して協力していただけるよう筆者からお願いしておいた。偶々、平成13年12月上旬に筆者と部員の一人が上京する機会に恵まれたため、港区高輪のマンションにあるマラウイ大使館を表敬訪問することができた。

■援助計画案の作成

(1) 事前準備

「援助」という抽象的な言葉に具体的な姿や形を与えることで、援助計画案作成に方向性が見出しやすくなる。そこで、以下に述べる①～③のを行うようにした。

① まず、マラウイに援助を行う際遭遇するであろう問題点、JICAが考えているマラウイ開発の方向性、JICAがマラウイで現在実施している具体的な事業等に関するレポート¹⁴¹を読ませた。

次に、マラウイで実際に行われている国際協力活動の中から3つを取り上げ、それらの特徴を様々な側面から明らかにさせた。その結果が表4に示されている。なお、この時部員が使った資料は、筆者がマラウイで研修を受けた際、各訪問先から配付されたものである。



表4 3つの国際協力活動の特徴

	マラウイ湖での魚養殖研究・事業への支援	マンゴチ橋建設のための資金援助	ワールドビジョンによるムチンジ孤児院支援
目的	住民の栄養改善	インフラ整備	エイズ孤児対策
内容	湖の生態系を崩さないように注意しながら在来種の魚を養殖し、地域住民のタンパク質需要を満たすための支援	インド洋に通じるモザンビークの幹線道路に、内陸国であるマラウイの道路を結びつけるための橋梁建設支援	エイズで両親を失った子どもたちに、衣・食・住・教育を与えるための孤児院経営への支援 ⁽²⁰⁾
展望	中・長期計画	短・中・長期計画	短・中期計画
協力形態	技術協力（専門家派遣）	無償資金協力（一般無償）	非政府組織の活動

② 現在、途上国で行われているユニークな開発戦略を紹介した。例えば、コスタリカであるが、ここではエコロジー（生態系）を保護し、それを観光資源にして地元の経済に役立てようとするエコ・ツーリズムが盛んである。つまり、自然を壊し工業開発をする代わりに、自然を残しその大切さを訪れる人々に伝えることを国の産業にしているのである。或るアメリカ人が始めたこの例からわかるように、全く新しい国際協力の在り方が世界各国で模索されている⁽¹⁷⁾。

③ 「100億円の援助計画案」を考える際、手がかりになるであろういくつかの援助候補分野を、ブレン・ストーミング法を使って部員に明らかにさせた。次に示す(i)～(X)は、「実践」の「情報収集」で知った内容や集めた情報、或いは「援助計画案の作成」の(1)の①と②で述べたことを参考に、部員がまとめたものである。

- (i) エイズ対策：対象は数多くある。例えば、感染者本人へのカウンセリングを含む医療支援・収入が得られるようにするための手助け・孤児60万人を含む遺族への援助・発生ルートの根絶・予防教育の実施・諸々の対策を担える人材の育成などがそうである。
- (ii) エイズ以外の感染症対策：マラウイではマラリア・コレラ・ペスト・狂犬病等がよく発生しており、これらを原因とする乳児死亡率が非常に高い。このような現状から、医療従事者養成・診断技術の向上・薬の安定供給・病院経営などへの支援が考えられる。また、マラウイ政府も、来て欲しい産業の一つに製薬・医療用具を挙げている。
- (iii) 水の確保：特に、乾季の間の飲料水・生活用水の

確保は大きな問題となっている。そのため、例えば井戸や貯水池を村に一つでも作ることが出来れば、女性は水汲みの重労働から解放されるし、水汲みのため学校へ通えなかった子供達も学校に通えるようになる。また、水が原因となって起こっている下痢等の病気を大幅に減らすこともできる。

- (iv) 栄養改善：マラウイではタンパク質不足が目立ち、貧血気味の人が多い。このような栄養不足への対策として、マラウイ湖等での魚養殖事業や農業改善事業への支援強化が考えられる。一方、地元密着型の支援も効果的である。と言うのも、例えば、アフリカでは僅か100円で実なるパオバブの苗を5本も買え、それがうまく育てば家族全員の栄養が大幅に改善されるようになるからである。また、1000円でひよこを10羽も買え、それがうまく育てば家族は卵を一年中食べられるようになるからである。
- (v) 環境保護：マラウイの日本への筆頭輸出品目（1998年の輸出総額の98.8%を占める）はタバコである。ところで、タバコの葉を乾燥させるには多量の薪が必要となるため、マラウイでは森林伐採による環境被害が拡大している。日本にも責任の一端があるこの環境破壊への対策支援も真剣に考えられていだろう。
- (vi) 初等教育：識字率向上を目指す初等教育無償化政策に伴い、在学率が急に上昇し、マラウイ全土で深刻な教師・教室不足が起こっている。また、遠く学校に通えない児童のための遠隔教育の整備も重要な課題である。
- (vii) 大学教育：この国最大のマラウイ大学でさえ、年

間受入学生数は僅か900人である。また、教員免許取得可能なカレッジが全国に2つしかないため、資格のある初等・中等学校の教員を年間270人輩出しているに過ぎない。このような状況からすれば、高等教育改善のための支援も真剣に考えられていだろう。

(viii) **身体障害者への支援**：様々な身障者の人にとって、社会福祉制度の発達していないマラウイでの生活は、数多くの大きな困難を伴っている。身障者の生活空間を広げ、生きる質を高めるための支援プロジェクトこそ人道考上考えられてしかるべきではないだろうか。

(ix) **観光開発**：熱帯魚の宝庫であるマラウイ湖（ユネスコの指定する世界遺産）でのダイビング等、未開発の観光資源がマラウイには多くあるが、少ないホテルのベット数・ホテルにツアーデスクすらない状況・未発達な土産物産業など問題は山積している。とは言え、観光はマラウイの国家目標になっている上に国際空港が2つもあるので、有望な支援対象である。ただ、信頼できる環境アセスメントを行う力がマラウイには不足しているので、観光開発を行うにあたっては、環境への慎重な配慮が是非とも必要になる。

(x) **マラウイ湖原産の熱帯魚の遺伝子特許化事業支援**：古代湖として有名なマラウイ湖には固有種の熱

帯魚が数多くいる。また、現在、世界で売られている熱帯魚の多くもマラウイ湖原産であるため、これらの遺伝子の特許化し、コスタリカのようなDNA立国を目指すことが出来る。これに加えて、固有の熱帯魚を図案にした切手産業を起こすことも可能である。しかし、このようなことを企画・運営できる人材がマラウイには殆どいない。

(2) 援助計画案の作成

① 部員は表3と(1)の③で挙げた(i)～(x)を参考に検討を重ね、最終的に医療と農業を「100億円の援助計画」の対象分野に決定した。

この決定を受け、両分野に対する各グループの興味・関心を更に高めようと以下の工夫を行った。まず前者の医療についてであるが、マラウイではエイズが急速に蔓延していることを踏まえて、NHKが平成13年10月24日に放送した『ETV2001 急増するエイズ 孤児 一タイ・75000人の子どもたち』を見せた。後者の農業については、CS衛星放送「朝日ニュースター」が、「地球家族」という番組の中で平成13年12月23日に放送した「マラウイの大地に根ざせ」～ロビ園芸適正技術普及プロジェクト～を、JICAインターネット放送局を通して部員に見せた。

表5 3人の話の中で特に参考になった点

元青年海外協力隊員 (医療：岩城ゆかり氏)	元青年海外協力隊員 (農業：上妻英夫氏)	JICA九州国際センター職員 (次長：野津善男氏)
<ul style="list-style-type: none"> *援助された物が、「本当に必要なものだ」と現地の人々がきちんと理解できるようにものを援助すべきである。 *昔ながらの生活をしている人が、そのスタイルを大幅に変えずとも、受け入れられるような物を援助すべきである。 *継続的に物が供給され、また継続的に使用されるように手配することが、マラウイへの援助では特に大切である。 *援助物資の盗難を含め、本当に困っている人が実際にどのようなことをするのか、豊かな日本人にはとうてい想像できないと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> *乾季を含めた、各種農作物の収穫までのサイクルの説明。 *食料の安定供給が確保されていないことが最大の問題である。 *少ない水の量で如何に収量を確保するのかという課題が解決されなければならない。大豆のような畑作なら、水をさほど必要としない。 *栄養価は、主食であるトウモロコシより米のほうがかなり高い。台湾がマラウイで行った米作援助プロジェクトはそれなりの成果を上げている。 *中央政府指導でプロジェクトを行えば、「勝手なことをするな」と地元の人から強い反発をかう。従って、農業支援プロジェクトは、現地の生活を深く理解した上で、今ある村の組織を上手く活用しながら実施する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> *現地の人々のニーズをどのようにして汲み上げるのが難しい。 *国際協力の現場では、如何に現地の人を育てるのが重要な課題になる。 *途上国の問題には多くの要因が絡んでおり、一つだけ原因を解決してもだめである。また、全部を一斉に解決することも無理である。そこで、大切なのはどこから先に手をつけるかである。 *解決を求めて多くの国が一緒に取り組むからこそグローバル・イシューだと言える。従って、例えば、マラウイ国のみでエイズ対策を行っても効果はあまり期待できない。 *被援助国の人にも、ある程度頑張ってもらわなければならない。



次に、JICAのサーモン・キャンペーン（講師出前講座）⁽²²⁾を利用して、実際に医療と農業の分野で働いたことのあるマラウイ派遣の元青年海外協力隊員に学校へ来てもらった。これは、彼（女）らから体験談を聞くことで、部員の立てる援助計画が机上の空論に陥らないようにするための工夫である。また、JICAの職員から実際に援助計画を立てるまでのプロセスを具体的に説明してもらった。これは、今回の実践で各グループに出来るだけ本物に近い立案過程を経験させたかったからである。3人の話の中から、特に役に立った点・参考になった発言を部員にまとめさせたのが表5である。部員は電子メールを通して、この後も引き続き彼（女）らから様々なアドバイスを得ていたとのことである。

なお、援助計画案を作成するに当たっては、特に以下のことに配慮するよう各グループにお願いしておいた。「2つの案に関するディベートの試合が有意義になるよう、援助目的や援助方法に対する考え方の違いがはっきりと現れるようにして欲しい。例えば、甲案が短期的な目標を掲げるのなら乙案は長期的な目標を掲げるようにするか、また甲案が輸入代替を目標にするのなら乙案は輸出増加を狙うようにするか、或いは甲案が政府主体で行うのなら乙案はNGO主体にするとか、である。」と言うのも、こうすることで自分たちが根拠としている価値観を吟味（相対化）でき、また自分たちと異なる思考・発想の仕方や価値観の存在に気づくようになるからである。

- ② こうして、各グループは具体的な援助計画案（立論）の作成に入っていたのである。

(3) 他者のアドバイス

- ① 筆者は、立論の第一稿をもとに、各グループと個別に検討会を行った。次に、必要な修正を加えてできた第二稿をもとに、非公開の試合を校内で実施した。ここまで各グループは独立して立論を作成してきたため、相手からの質疑・反駁を受けたのはこの時が初めてである。この結果を踏まえ、各グループはもう一度リサーチを行った。こうしてできた第三稿の要約を英文に直し、それをマラウイの高校に送り、論評を依頼した。協力してくれたのはゾンバ市にあるムラング

ジ高校の生徒と教師である。彼（女）らが教えてくれたことを参考に第四稿を作り、2回目の試合を本校の一般生徒・教師の前で開催した。試合後、わかりにくかったことや論理上の問題点などを観戦者から指摘してもらった。また、全国ディベート連盟の人をこの試合に招待していたので、彼らからもアドバイスを頂くことができた。こうして立論の最終稿が出来上がったのである。なお、第一稿と最終稿とを比べてみて、大幅に変わったのは次の4点である。

- ・抽象的な援助計画だったものが、より具体的なものになった。
- ・マラウイ以外の途上国にもそのまま当てはまるような援助計画だったものが、マラウイの特徴を踏まえたものになった。
- ・地域差を無視した全国一律の援助計画だったものが、地域の特性を生かしたものになった。
- ・途中のルール改正に伴い、立論内容・構成が「パワー・ポイント」を使って補足説明出来るようなものになった。

■本試合

- ① ディベートの専門家にはこれまでと同じ基準で、またJICA職員には援助の専門家としての立場で、どちらの計画案がより優れているのか判断するようにお願いした。

本試合は、平成14年3月10日、63名（高校生40名、大学生4名、高校教師5名、ディベート専門家2名、JICA職員4名、元青年海外協力隊員2名、父母6名）の聴衆を前に、北九州市にある国際協力事業団・九州国際センターで行われた。試合の大体の流れは表6に、判定及び審査員からのコメントは表7に示してある。

- ② 試合が終わった翌日、今回の実践を担った8人の部員にアンケートを行った。その内容は表8に、また項目①～④の結果については表9に示してある。表9からわかるように、殆どの生徒は目標としていた（ア）～（エ）の力を「少なくともある程度は身につけることは出来た。」と考えている。その理由として（ア）～（ウ）ではディベートを、（エ）ではトレード・オフの導入を挙げる部員が最も多かった。

表6 本試合のフォーマット

	内容及び論点
農業側立論	マラウイの基幹産業である農業を脅かすものに、洪水と干魃がある。特に、灌漑設備が整備されていないため、農業が自然まかせになっており収量が安定していない。そのため、栄養不足が長期間に渡って発生する可能性がある。そこで、マラウイに適した農業インフラを造るための技術を教える学校を設立することを提案する。期待される効果は、技術普及による収量の安定と増加、そして栄養改善である。
医療側質疑	洪水や干魃の発生頻度及び被害状況はどのようなものか。また、灌漑施設を造った場合の収量増加をどのくらいと予想しているのか。その増加分は、果たして投資額に見合うものなのか。
医療側立論	プロジェクト目標を、HIV新規感染者の減少とする。エイズがマラウイでこれほどまでに蔓延した理由は、知識不足と男尊女卑の考えにある。この2つを長期的に解決する方法として、地元の有力者（宗教指導者等）と協力して実効性ある予防教育プログラムを作ることを提案する。このプログラムを、まず南部の人口稠密地区で試み、徐々に全国各地に拡げていく。
農業側質疑	教育・研修のみに資金が投入されるのか。このプロジェクトが前提としている考えは、「問題を認識さえすれば風習や行動も変わる。」ということではないのか。また、各地域の特性にあった教育プログラムは本当に作れるのか。
医療側攻め反駁	農業不振は灌漑施設の不備以外にも原因がある。それに、少しずつ灌漑施設を増やしていくこの方法では、時間がかかりすぎる。収量の安定と増加が目標なら、技術学校を作るより日本人が直接灌漑施設を作る方が効率が良い。それに比べ、マラウイでは国民の16%が今エイズに罹っており、労働力の激減など国の存立基盤そのものが危うくなっている。この深刻な事態の方にこそ目を向けるべきではないのか。
農業側守り反駁	技術移転がもたらす長期効果こそがマラウイにとっては重要なのである。また、エイズの発症（感染ではない）には栄養不足が直接関係しているのではないのか。
農業側攻め反駁	教育だけで国民性を変えるのは非常に難しい。予防教育を実施して予防の大切さが理解できたとしても、それを実際に行動に移すかどうかはわからないからである。それに、宗教・生活習慣も全く違うマラウイにどのような教育方法が適しているのかわかる日本人が一体どれくらいいるだろうか。
医療側守り反駁	どの国が対策を担う方がよいなどと言えないくらい、マラウイではエイズを取り巻く状況が深刻である。一方、タイなど実際にエイズ予防教育を実施したところでは、HIV新規感染者が確実に減少している。
医療側総括	洪水や干魃が起きるかどうかは自然次第である。また、たとえ灌漑施設ができたとしても、それによる収量増大は微々たるものである。それに、他のアフリカ諸国に比べて、マラウイでの栄養不足がそれほど深刻なわけではない。それよりも、極めて深刻な状況に陥っているエイズ問題にこそ取り組むべきである。このままエイズを放っておけば、労働力不足がますますひどくなり、やがては農業生産力の更なる低下も引き起こされるだろう。日本も何らかの協力をすべきである。
農業側総括	エイズ教育は、日本よりノウハウの蓄積された米国等が担う方がいい。それに対し、灌漑施設作りは日本が得意とする分野である上に、造れば必ず成果が得られるものである。2つのプロジェクトがもたらす100年後のマラウイの姿の違いについては是非考えてほしい。

PAPER

表7 本試合のフォーマット

審査員	判定	コメント
ディベートの専門家	医療側の勝ち	質疑と反駁がよくかみ合っており、議論がわかりやすく面白かった。また、語りかけるような話し方が印象的だった。ただ、灌漑施設不足がもたらす被害の深刻性、及び対策をとった場合の具体的な効果について、立論でもう少し詳しく述べて欲しかった。一方、医療に関して言えば、マラウイの人口ピラミッドを示すなどして、どの地域の、どの年齢層が、どう理由で問題なのか、またそれへの対策はどのようなものかについてまで説明して欲しかった。
JICA職員	医療側の勝ち	少ない時間でよくここまで調べたと思う。論点は、どちらの方が日本が担当するのによりふさわしいのかということと、どちらの方がより効果があるのかということに絞られていた。ただ、双方とも援助対象分野の対決で終わっており、具体的プランの検討まで議論は深まらなかった。また、双方とも地元の人々の理解をどう得るのかについての説明もなかった。判定は、対策により具体性があった医療側の勝ちとする。



表8 今回の実践に関するアンケート

下記の項目について、1~5の数字、または文章で答えなさい。
 (1: 同意、2: 有る程度同意、3: 不明、4: 有る程度不同意、5: 不同意)

①目標にしていた(A)の力は身についたと思うか。 ()
 そうならディベート形式・具体的テーマ・国際的テーマ・一次情報重視・トレードオフ導入・その他のどのせいかな

②目標にしていた(I)の力は身についたと思うか。 ()
 そうならディベート形式・具体的テーマ・国際的テーマ・一次情報重視・トレードオフ導入・その他のどのせいかな

③目標にしていた(U)の力は身についたと思うか。 ()
 そうならディベート形式・具体的テーマ・国際的テーマ・一次情報重視・トレードオフ導入・その他のどのせいかな

④目標にしていた(E)の力は身についたと思うか。 ()
 そうならディベート形式・具体的テーマ・国際的テーマ・一次情報重視・トレードオフ導入・その他のどのせいかな

⑤テーマに具体性・国際性があったことをどう思うか。

⑥一次情報を重視したことをどう思うか。

⑦トレードオフの関係を入れたことをどう思うか

⑧今回の実践で、良かったこと・残念に思ったことがあれば具体的に書きなさい。

表9 アンケートの結果

項目	以下の評価を選んだ生徒数					生徒が選んだ要因
	評価1	評価2	評価3	評価4	評価5	
①	2	5	1			具体的テーマ(2人)一次情報重視(2人)ディベート形式(4人)
②	2	5	1			具体的テーマ(3人)ディベート形式(4人)トレードオフ導入(1人)
③	4	2	2			具体的(2人)国際的(1人)ディベート(4人)トレードオフ(1人)
④	3	4	1			具体的テーマ(1人)ディベート形式(3人)トレードオフ導入(4人)

次に、このアンケート結果を踏まえて面接調査を行った。生徒の感想をまとめると、以下のようになる。

(i) テーマに具体性があったため、問題をよりリアルに、またより広く深く考えることが出来た。これまで、水掛論的なディベートに陥ることが多かったが、それはテーマに具体性がなかったからだとわかった。一方、課題が責任ある援助計画案の作成だったため、途上国の人と共に生きる自分たちの存在を感じながら、マラウイの将来像やあるべき国際協力の姿について考えることもできた。このように、今回のテーマは知的刺激に富み、また自分たちの経験の幅を大きく広げてくれるものであった。

(ii) 「事実はどうなのか」という点を重視したため、議論がわかりやすいものになった。

また、これまでのディベートでは論点が既に本の中に書かれている場合が多かったが、今回は一次資料をもとに自分たちで論点を新しく創り出すことが出来た。その上、一次情報を求めて国連などが有する統

計資料を調べた結果、国際機関が持つデータの検索方法やその活用の仕方もわかるようになった。ただ、これらの殆どが英語で書かれていた上に、マラウイに関するデータが欠けている場合も多かったため苦労したのは事実である。一方、一次情報を深く読みとるには、やはり専門家の助け・解釈が必要なこともわかった。

(iii) トレード・オフのもとでは、より優れた援助案の方に軍配が上がるため、相手の完全な否定を目指す必要がなくなった。そのため、これまでのディベートに比べると、立論はよりわかりやすいものに、口調はより柔らかなものに、内容はより建設的なもの変わった。また、相手の主張に素直に耳を傾けられるようになり、反駁されてもそれを冷静に受け止めることが出来るようになった。従って、こういった方法なら、実社会で役に立つ力が必ずつくと思う。

(iv) 途上国の抱える具体的な問題について、初めて多角的に考える経験を持つことが出来た。ただ、残念だ

ったのは、貧困の実態・病人を取り巻く状況・相手が求めているもの・生き様や価値観などについて、マラウイの人たちに直接聞く機会がなかったことである。

(v) 今回のディベートには、農業支援か医療支援かという論点と、各々の援助プロジェクトの効率比較という論点があった。試合をよりわかりやすいものにするには、テーマを援助分野の比較に絞るか、或いは一つの決まった援助分野の中での実施方法の比較に絞るか、のどちらかにすべきだった。

(vi) マラウイ一国だけの問題としてでなく、グローバル・イシューとしてどう解決していくのかについて考える機会が組み込まれていればなおさら良かったと思う。

考察

(ア)～(エ)の4つの力が必要なのは、ケア報告⁽²³⁾が将来のグローバル公民に持たせたい最小限の知識や技能の一つとして、「分析的で創造的な思考活動、概念や課題の明確化と認識、必要な情報、代案の分析と責任ある公的選択能力の形成」をあげていることからわかる。しかし、ローレン⁽²⁴⁾が指摘しているように、日本の教科書にはこの力を育てるための前提となる難しい選択場面が提示されていない。そこで今回、具体的問題についての解決策を2つのグループに作らせ、判断と選択を迫ることで、(ア)～(エ)の力を育てようとしたのである。

アンケートと面接から、生徒は今回の新しいやり方に最初戸惑っていたがすぐにその知的面白さに気づき深く没頭していったこと、また(ア)～(エ)の力をつける上でそれなりの効果があったと認識していることが明らかになった。幸い、今回のような活動は、過程で身につく(ア)～(エ)の力の方を重視しディベートとしての試合結果をあまり気にしなければ、専門の審査員がいなくても実施することができる。つまり、今回の手法は他の高校でも用いることができるのである。

終わりに

筆者が今回のような教育実践の必要性を感じたのは、英語を使った双方向的コミュニケーションの授業を

行おうとする際、その前提となる(ア)～(エ)の力を育てる訓練が日本で殆どされていないことがいつも大きな障害になっていたからである。

日本語での厳しい訓練により(ア)～(エ)の4つの力が育てば、例えば日中の高校生によるレベルの高い交流を企画することも可能になる。と言うのも、グローバルな問題に対する両国の考え方の違いを客観的に知ることができるので相互理解がより深まり、また利害対立を超えた「地球にとって最善の解決策」を一緒に模索することができるので親善という形だけの交流を遙かに超えたものが生み出されるからである。

深刻な対立を引き起こす可能性のあるグローバル社会の出現を前に、筆者の例に止まらず、(ア)～(エ)の力を育てるための日本語を使った様々な教育実践の積み重ねが、今まさに求められている。

注

- (1)『新しい開発教育のすすめ方』、開発教育推進セミナー編、古今書院、1995年、25頁に、「意志伝達技能(コミュニケーション技能)はいかなる社会においても必要とされる基本的な技能であるが、これまでの日本の学校教育で十分に育成されてきたとはいいがたい。意見発表や討論の機会が少ないために、自己の考えを表明し、他者の意見に耳を傾け、考えを深めて反駁し、といった双方向的なコミュニケーションに慣れていない」とある。
- (2) 国際協力の問題を題材に選んだのは、高校生の関心が特に高いということもあるが、それ以上に、先進国に住む人々が知らず知らずのうちに豊かな物質社会に慣れてきてしまい、途上国の人々の考えを理解できなくなってきているからである。また、マラウイにしたのは、「この国には問題が多いので、途上国について色々考えるのに最適」(国際協力事業団 マラウイ事務所所長談)だからである。更に、過去3年にわたるマラウイへの無償資金協力(総額約100億円)の使われ方を調べれば、この金額で現在実施可能なプロジェクトの規模について大体のことがわかるので、援助総額をこれと同じ100億円に設定したのである。
- (3) 平成4年6月30日に閣議決定された日本のODA大綱には、重点事項として次の項目が示されている。①地球規模の問題への取り組み、②基礎生活分野等、③人作り及び研究協力等技術の向上・普及をもたす努力、④インフラストラクチャー整備、⑤構造調整等、の5つがそうである。また、平成12年8月にマラウイに派遣されたプロジェクト確認調査団により、我が国のマラウイへの援助重点分野を以下のものとする事で合意が成立している。①基礎生活支援、②経済インフラ整備、③中小・零細企業育成、④開発行政実務者・専門技術者の人材育成、⑤持続的開発のための





資源保全・環境保護、の5つがそうである。

- 一方、1999年にマラウイの統一民主戦線党が出した政策に関する宣言には、最優先課題として国民の貧困緩和が明記されている。この宣言は更に、食料保障や産業の保護、教育、医療、道路整備や企業への貸し付け制度などの改善が、マラウイ一般庶民の生活の向上のためには必要だと述べている。
- (4) 共通ベースをもとにした従来のディベートと違い、政策立案型のディベートでは一回きりの攻防だけでは議論が深まりにくい。また、従来のままでは、言われたらすぐ反論するというディベートの面白さも維持しにくい。そこで、今回は反駁を二回に分けるようにしたのである。
 - (5) 日本経済教育センターが製作したもの。
 - (6) 『いま私たちにできること』、国際協力事業団 (JICA)、1996年、30頁。
 - (7) 研修員受け入れ、専門家派遣、調査団派遣、青年海外協力隊派遣、機材供与等。
 - (8) 一般無償、水産無償、食料増産援助等。
 - (9) <http://www.yu-cho.yusei.go.jp/volunteer-post/> 参照。
 - (10) Rob Nierse, Introduction to Bao. これは、<http://www.gamecabinet.com/rules/Bao.html> から取り出したものである。
 - (11) 『平成10年度高校教師海外研修 ―授業に役立つ開発教育教材集―』、国際協力事業団、1998年、28-33頁。
 - (12) 拙稿、「中学・高校教師海外研修 マラウイ研修報告書」 「マラウイ (アフリカ) で気づいたこと」 「闇の持つ意味 ―アフリカ・マラウイでの発見―」、2001年。
 - (13) これはメディア・リテラシーの問題である。部活動の一環として、Pat Clarke, Teaching Controversial Issues, Green Teacher, No.31, 1992, pp.9-12 を読ませていたが、このことがここで大いに役に立った。というも、この論文では、正確さ・妥当さ・充分さ・公正さ等

の観点から情報を吟味する方法がわかりやすく解説されていたからである。

- (14) 『国際理解教育』、東京都高等学校国際教育研究協議会編、清水書院、1999年、194-218頁。
- (15) JICA九州国際センター・総務課の大久保宏明氏が、今回の実践のために作成してくれたレポートである。
- (16) <http://www.worldvision.or.jp/> 参照。
- (17) 『With Your Love』no.10, 郵政事業庁貯金部管理課、2001年、2-4頁。
- (18) 開発途上国の実状を伝え、国際協力の必要性を理解させるために、JICAが職員や専門家・元青年海外協力隊員、研修員等を講師として派遣する制度。
- (19) 魚住忠久、『グローバル教育』、黎明書房、1995年、38頁参照。
- (20) Thomas P. Rohlen, JAPAN'S HIGH SCHOOLS, Berkeley: University of California Press, 1983, p.252.

■参考文献

- ① A New Macmillan School Atlas for MALAWI, MACMILLAN MALAWI, 1998
- ② 星美代子、『The Warm Heart of Africa ―医療と貧困とアフリカへ730日の挑戦―』、近代文芸社、2001年。

■協力機関

- ① 国際協力事業団 九州国際センター
- ② 青年海外協力協会
- ③ 全国教室ディベート連盟 九州支部
- ④ 駐日マラウイ大使館
- ⑤ 国際協カプラザ
- ⑥ 福岡市農林水産局農業施設推進課